

明治中學會編著

中學全書

一宮文
致

國文講義

全

265

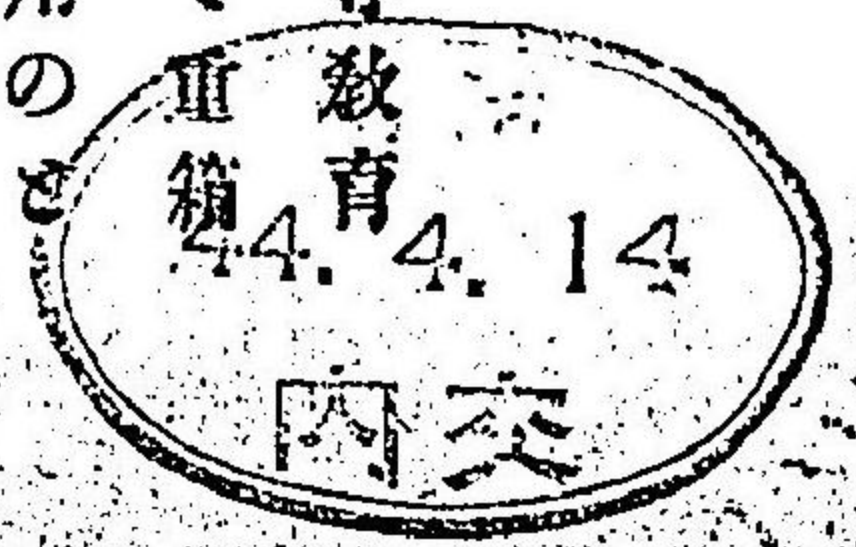
778

發行所 東京 明治中學會

國文講義

國文の講義もいろ／＼あつて、今更こゝで餘計な様ではあるけれども、中等教育の國文といふものは、何も別に専門家が攻究するやうな、面倒臭い、小楊枝で角を掘るやうなことは、いらぬ、たい何をするにも、この學科の力が入用なさい、いつでも應用するだけの得心がゆきさへすればよいのであるから、何もの極まつた本を用いずともよろしい、そこで予がこの講義もたいいつでも應用が出来るやうの實力を養成する方針で選ぶつもりである、就いては書物は勿論、何でもきめまい、程度を見計らつて、だん／＼に六かしいものに進むのであるから、初の内では、どんなことになるか分らぬが、辛抱して居ると自然に力がついて来る、

講義の仕方は、漢文と同じやうにやるが、たいこゝで斷はつて置くことは、程度と事柄の關係に氣を付けるといふことであるが、何事でもさう／＼御詔向に出来るものは、さういふ程度を甘くすれば、事柄の關係はさう／＼構つて居られない、尤も



今の教科書とかいふものゝやうに、矢鱈と事柄の關係ばかりに氣を付けて、肝要の程度が滅茶にするのは譯もかゝい、直きに出來るが、ソんな杜撰なことは出來ない、實力を養成するには、程度を適當に斟酌して、トツクリと得心させるのが第一であるから、予の講義は程度に目を着けてゆく。

老僧の接木

鳩 巢 室 直 清

老僧は、年老た坊主のこと、○接木は、木を接ぐといつて、木の幹に、外の木の小枝を切りて、接ぎ生やすことで、臺接だの寄接とか呼接とかいふものもある、この文は漢文の説体であつて、或る一つの話をもつて來て自分のことゝか人のことゝか、何か外のものごとゝに落す体である、今翁も、からが鳩巢自分自身のことゝに落して來たので、それから前はたゞ將軍家と老僧との問答を書いたばかりである、極めてやさしい文章であるから、一一文法を話さずとも解るのである、この文へ作者室鳩巢の傳は、漢文の方で話して置いたから、その方を見れば分か

將軍家、谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちとこゝかしこ御過ぎがてに、御覽ましけるが、此の寺へも、たもほえず渡御ありしに、折ふし其の時の住僧、八句に及びたるが、庭に出で、みづはぐみつゝ、手づから接木して居たり。

〔摘解〕 將軍家は、だれともハツキリ解らぬ徳川綱吉でもあらうか、○わたりは、邊のこと、○鷹狩は鷹を使つて狩をする、○かちとは徒歩でといふことで、乗りものもさく歩くこと、○こゝかしこは、ソコ、ココ、といふこと、○がてには、ツイデにといふこと、○ましくは、御座るといふこと、あるといふことを敬ひていふとき用ふ語である、○此の寺は、何寺か確かには知れない、たゞこゝにいふ老僧の居る寺のことをいふ、○おもほえずは、思はず、又は思ひがけなくなどいふこと、○渡御は、御渡りのことでお出でになること、貴人に用ふ、○折ふしは、丁度この時といふこと、○住僧は寺に住つて居る僧である、○八句は、八十のこと、○みづはぐみつゝは、水で木を培ひながらといふこと、みづはぐみつゝであらうか、それとも老人のたつしやのことにみづはぐむといふことがあるから、たつしやの風をしかが

らといふことであらうか、此處では矢張り達者ちしやの方にするがよからう、○手づか
らは、自からといふこと、同じで、自身手を下してといふ意味である、

〔通解〕 將軍家が谷中のあたりで御鷹狩をさされたときであるが、御徒歩でこ
ゝること御通りながらついでに御見物して御出でさつたが、この寺へも思ひ
がけもなく御出でなされたところが丁度そのときその寺に住つて居た僧で八
十にもなつて居るのが、庭に立ち出で、達者に自らで接木をして居た、

御供の人々は、おくれ奉りて、御側には二人三人つき奉りしのみありければ、やんご
となき御方とは思ひもよらずそのまゝ背せまきゐたりしを、坊主なほ事するぞ、と仰せ
られしかば、老僧心にあやしどやおもひけむ、いとほしたなく、接木するよ、と御いら
へ申し、かば、御わらひありて、老僧が年にて、今接木したりとも、其の木の大きなる
までの命はしれがたかるべし、それにさやうに心をつくす事、ふようなるべきぞ、と
上意ありしかば、老僧彌々いよいよふづくみて、御身は誰人なれば、かく心なき事を云はるゝ
にか、よくたもひて見給へ、今此の木どもをづきておきなば、後住の代に至りて、いづ
れも大きになりぬべし、然らば林もしげり、寺もくろみかん、我は寺の爲ためをたもひて

するなり、あながちに我一代に限るべき事かは、といひしをさこしめして、老僧の申
すことこそ、尤理なれ、と御感ありけり、

〔摘解〕 奉りては、敬ひていふときに自分の動作につけていふ語、○やんごとな
きは、やむことおしといふ語であつて、貴いといふこと、○背せまきは、背をそむけてと
いふこと、○ぞは、かといふ疑問であるが、上から下のものにいふとき用ふ、○わ
しは、へんとか妙なとかいふこと、○いとほは、最の字が當るので、この上もならぬこと、
○ほしたなくは、あいそなきこと、○いらへは、返答挨拶すること、○ふようは、いら
ぬといふこと、不用とかくのた、○彌々いよいよは、前よりもなほといふこと、○ふづくみは
憤ること、ムツとしてをこる、こと、○心なきは、思慮しりょのないこと、○あながちは、強
いてむりにといふこと、○かはは、反語で、あるものかといふこと、○さこしめして
は、聞きてといふことを敬ひていふ語である、○尤理よくりは、尤も至極といふ意味で理
一字でもつともといふのである、○御感は、御感心といふこと、

〔通解〕 將軍家にお供をして居た人々は將軍家が御徒歩でおいでになるのに
おくれておいつかなかつたものであるからお側について居たものはホンの二

六
 人が三人しかなかった、それだものであるから老僧の方では將軍家ともいふ貴いお方だといふことを知らないのは勿論のこと、將軍家など、は思ひもよらなかつた、それで背をむけたまゝ、振り向きもしないで、一生懸命に接木をして居ると、將軍家は坊主は何をして居るのだと、押柄に仰しやつたから老僧は心の中でへんだと思つたのでもあらうか、あいそもせじもなく、接木して居るのだよと返事した、それだから將軍は可笑しかつたと見へて御笑ひなされて、老僧のやうかよい年でもつて今接木したからといつても、其の木が大きくなるまでお前の壽命があるかないか、知れぬではないか、それなのにそんなに心を盡して一生懸命で接木なすすることはいらぬことであらうぞよと、また上意があつたら老僧はあほもムツと憤りて、御身は誰人であつてそんな思慮のないことを云はれるのですかよく／＼考へて御覽なさい、今私がこの木なんかを接いで置いたならば私の後にこの寺に住ふ僧の代になつて、これもこれも大きい木になるでせうしたならばこゝの林も茂つてよくなり、この寺も黒み奥床しくあるで御座りませう、であるから私はこの御寺のためになるといふことを思慮へてする

のであつて、存にもむりに私の一代さへよければそれでよいと自分の代ばかりに限つてすることでは御座いませぬ、といつたのを將軍家はお聞きなされて、老僧の申すことは尤もの次第である、と仰せられ御感心遊ばされた。
 その程に御供の人々おひ／＼來りつゝ、御紋の御物ども多くつどひしかば老僧それに心づきて大におそれ、奥へにげ入りしを御めしいだしありて物など賜りけりとなむ

〔摘解〕 その程には、そのうちにといふことで、○おひ／＼は、だん／＼といふこと、○御紋の御物といふのは、將軍家の御定紋葵のついて居る品物をいふので、御供のものなんか、將軍家御用品をもつて御供して居たから、その荷物をいふのだ、○つどひしかばは、集つたからといふこと、○それに心づきは、その品物などに氣がついて將軍家であるといふことがしれたといふ意味で、○物などは、いろ／＼の品物などをいふことで、○賜は、與ふといふことを敬ひていふときに用ふ、タマハリと讀むのは敬稱して用ふのである。

〔通解〕 さうかうして居るうちに、お供の人々が追々來るし葵の御紋のついた

・物などが澤山に集まつたから、老僧もそれに心がついて、將軍であつたといふことが知れたものであるから、これは大變なことを致した將軍に對して失禮なことをいつたから、定めしお咎めでもあるだろうと、大變に懼れこはがつて奥の方へにげこんでしまつた處が將軍家にはた召び出しになつて、いろいろの品物を御下し置かれたといふことである。

今、翁も彼の接木しけむ老僧の如く、老イ朽ちぬれども、ある限は舊學をきはめて人にも傳へ、書にも遺して、後世にも傳ふべし、これによりて、もし正學の開くる端ともなり、此の道のため、萬一の助ともなりなば、翁死しても猶ほいけるが如し、古人のいはゆる、死しても骨くちすといひしこそ、思當り侍れ、いささか我が身の爲に謀るにあらず、諸君も、翁がこの意を信じ給へかし。

〔摘解〕 今、現在まのあたりをさしていふときに用ふ語で、○翁は、鳩巢自身が私といつてゐるので○しけむは、したといふといへること○ある限は、この世にある限りといふことで、生きて居る間といふこと○舊學は、古き學問といふことで、昔の學問をいふのである。○きはめては、究めてといふことで、研究することを

いふ、○傳へは、口で傳授すること○遺しては書き遺してといふこと、○正學は、正しい學問といつて人倫道德の學問をいふ、尤も今の(デモハイカラ)なんかのいふ口先さばかりの人倫でもなければ、道義でもない、實踐躬行の學問といつて身を修めて聖人ともなり賢人ともある學問である、これも今の中學や小學で教へて居るツマらぬ修身學とはちがふたい人前ばかりを飾る似而非ものではない、眞正の聖人賢人となる學問である、○開くるは、開け明かになつて行くこと○端は、もの、端といふことで、始まりのことをいふ、○此の道は、上にいつた正學の道である、○猶ほ、まるで、丁度など、いふも同じこと○侍は、ありとか居りとかいふ語を敬ひていふときに用ふのである、こゝではその意味でマスといふ意味にとるがよろしい、○いさゝかは、少しといふこと○意は了見のこと、○かしは、念を推していふ意の感動詞である。

〔通解〕 今この翁の私も、前にいつたあの接木をして居たといふ老僧のやうに、年はとつて朽ち果てる即ち死んで仕舞ふけれども、まだ生きてこの世の中に居る間は古き學問を研究して人にも傳へるし、書物にも書き遺して後の世にまで

も傳へるからして、これでもつて正學の開ける片端にでもなつて此の道のために萬分が一の助けともなつたならばこの翁の身は死んで仕舞つても精神は書物や赤にかになつて遺るからまるで生きて居るのも同じことである、古の人が「死んでも骨は朽ちはしない」といつたことが今は「たと思ひ當るのである、かういふ風であるから私が今いろ／＼のこゝろをしたり話したりするのも少しも自分の身のために謀りてするのではない、自分ばかりのことを思ふのではないことは接木して居た老僧が自己一人のためをはかつて接木したのでないのと同じことであるから諸君もそのつもりでこの翁の丁見をまこととして信じて下

善に遷る

益 軒 貝 原 篤 信

善といふのは、道理にかゝつたことをいふのである、遷といふのは、或ところから或ところへうつりかはつてゆくことであるから、善に遷るといへば、道理にかゝ

つたよ／＼方にうつりゆくといふ意である。

この文は學問をするものゝ心得にあることで眞の正しい學問といふのは鳩巢の文の中にあつた正學であつて實踐躬行といふことを離れない修身の學である、修身の學をするには善に遷るといふことが肝腎であるといふことをかいたもので、今の若い人などは極く／＼適切した戒めであるから一言一句も等閑にしないで讀んでほしいものだ。

この文を書いた貝原益軒といふ人は、筑前の福岡の人で山崎闇齋とか木下順庵とかいふやうな學者について正しい學問をした人である、さうして世の中の人のために、そのことや物を濟つたりなにかする實用と云ふことを主とした人である、それで自分が學問して信じた道理をこの世の中に行はうといふ積りであつた、さうするには自分の意見を世の中に發表しなければならぬ、發表するには成るだけ廣く誰れにも解るやうにしなければならぬところから著した書物には和文でかいたものが多い家範、郷訓、大和俗訓、養生訓、女大學、あんどいふものはみな假名文である、しかし今の學者のやうに假名文ばかりかゝりぬといふ人では

十二
ない、漢文もかけるから憤思録、初學知要、自娛集などいふ漢文でかいたものがある、今の口先ばかりは國粹とかなんとかいつてもホンの漢文のかけないといふことをかくす卑劣手段に過ぎない奴とは大違ひである、姓は貝原、名は篤信、字は子誠といひ、益軒は號であるがまた損軒とも號した正徳四年に八十五歳で死んでしまつた

學問は、身を修め、人倫の道を行ふを以て根本とす、身修まらざれば、人倫の道行はれず、身を修むる道は、善を見ては遷り、過あれば改むるを以て要とす、身を顧みて人に責めざらむことを務むべし、人の善を見ても遷らず、吾が過を知りても改めざるは一^{ひた}向道に志なき人なり、

「字義」 學問といふのは、自分よりも先きに道理を辨へ知つて居る人のすることといふことを真似て覚えるのをいふのである、先きに道理を辨へ知つて居る人の真似するのであるからこちらには少しは疑や解らぬところがあらうそれを問ひ質すのが問といふものであつて學と問といふものは離れることの出来ない關係をもつて居るから學問といへば漢文の方でいふ學一字でも澤山なので

ある、かういふと人は本を讀むのは學問でないかといふ觀念を起すであらうがそれは皮相の見である、そも／＼吾々より先きに道理を辨へ知つたものは大抵この世に居ない、たとひ居たとしても親しく就いて學ぶことの便りがあるものは少い、そこで致し方がないから昔からの先覺聖人賢人のいつたことや行つたことを記してある書物を讀み覺えてそれを手本としてやつて行かなければならぬ、であるから學問といふものは行つてゆくことを覺えるためであつて行といふものを離れて學問といふものはないのである、詳しいことは後日漢文の方で話さう、○身を修める、身といふのはこの人間の体を具へた身である、その身を程よくとへのへゆくのが身を修めるといふことである、たとへば人の子となつては子たる身は親に孝を盡すといふことが身を修めたのである、○人倫、人間の筋道といふことで、人間といへば必ずしなければならぬ筋道である、人間がこの世の中に居るときは他との關係についてそれ／＼の筋道がなくてはならぬ、第一に自分の出て來た親といふものがある、この親といふものと自身との關係は自然について居るものである、次に世の中に出る上は、君といふものがある

それから自分より年の上のもの尊いものまた朋友といふものがある、また夫婦の關係も生じて來るのであるがこの五つの關係であらゆる他に對する關係は盡されて居るのであるからこの五つの筋道を五倫といつて人間のする筋道としてあるが之を取り聚めていふと父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信の五個條となるこれを一一講義すると長くなり過ぎてしまふからこゝでよして置かう、○道は往來の路と同じことであつて、人がどこかへゆくにもそれ／＼順路があつてその路を通らなければ行くことの出來ない路がある、それと同じに人間となつてゐる以上には人間たるものゝ行かなければならぬことがある、そのことが即ち道といふもので、往來の路といふ字からかりつけたのであつて之を借字といふのである、○行は、やつてゆくことで、○根本とは草木が根と本があつて生長すると同じで大事のくといふことを根本といふのである、○過は過誤過失といつて失策のことをいふ、つまり道理と思つてしたことが道理であかつたといふやうなのが後であつて初から道理でないと知つてするのは惡事、で過ちとはいはないのである、○改むは、わるきことをよきやうになはすことを

いふのである、○要は扇子の要といふ字であるが肝要といふことにいふのである、扇子も要がなければ開けたり閉めたりして扇子の用をたすことが出來なからう、扇子の要が扇子になくてあらぬと同じやうに、善を見ては遷り、過れば改むるといふことは身を修むる道になくてあらぬことであるからこの字を用いたのである、○身を顧みては、自分のことを自分で考へ見ることである、自分の身のことを考へるといふこと、○人に責めざらむことは、他人に對して負はざること、即ちア、してでもくれさうなものカウしてもくれさうなもの人に對して負はせることをいふのである、○務むは、勉の字とは違つて、本務とすることで精を出すといふことでは、尤も精をたすといふ意も含まれて居るけれども、本務として精を出すのがこの務むるといふことである、○一向は、いつかうに、またはどんと、なせといふのと同じである、○志は、心の之く所を志といふとあつて、人間の心が、あアしやう、かうしよう、と動き活らいた所をいふのであつて、つまり、ユキといふことである、

〔通解〕 一体學問といふものは、自分の身を修め、人の人たる人倫の道を行つて

ゆくいふのが、土蓋根本となるのである。されば自分の身が修まらないときは人倫の道は行はれるものではない、してまた身を修むるといふのには方法がある。人の善いといふことを見れば自分がそのやうにしてゆき、自分に過があつたならば、改の直すといふのが肝要のことである。自分の身に立ちかへつて、自分の善悪を考へ、自分に出來るか、出來ないかを考へみて、他人に對して責むるやうにすべきである。しかるに他人が自分より善きことがあるのを見ても、その善いことに遷らず、自分に過ちのあるのを知りながらも、改め直すといふことをしないものは、どんと道といふことに志のない人である。

(章意) 學問は修身倫理を行ふのが根本である。學問の根本を修めるのには、善に遷るといふことが第一である。

(文法) 學問の根本を説き、善に遷ると遷らざるによりて、道に志あるものと道に志なきものを分つたので、これまでを第一、大段とする。

過を知らば、惜まらずして速に改むべし、學問の道は他なし、過を知りて能く改め、善に遷ることをむねとするにあり、學者常に心にかけてつとむべし、過を改めんとなら

ば、まづ吾が過を知るべし、人の過はしり易く、吾が過は知り難し、そは人を見るには私なきが故に明なれども、吾が身には私を交ふるが故に暗ければなり、吾が身に過ありて、知らざるは愚あり、知りて改めざるは惡なり、其罪深し。

(摘解) 惜は物を捨て難いことで、ラシガルなどいふと同じことである。○速は早くといふことで、すぐにといふこと。○他なしは、外ではないとか、外にはないとかいふときに用ふ言葉である。○能は、俗にいふヨク何々をしたものたなどいふヨクと同じである。○むねは、主といふのと同じで、それ一方に重きを置いてすることである。○學者は學問をする人のこと、今いふ學問の出來る、博士や學士を、アレは學者だから出來るとかなんとかいふ學者とは違ふのである。つまり學生ともいふべきものである。○常には、平常といつて、いつでも變りなく、即ちふんといふこと。○心にかけては、念頭においてといふことで、忘れずに心をつけてといふこと。○からは、假りに定めてといふときに用ふる語で、俗語にも、何々する、なら、なんといふと同じである。○まづは、マア第一にといふこと。○そは、それは、いふことで、或る事の譯をいひ出すときに用ふる語である。その譯はなといつ

てよからう、○私は私事私曲をいって、自分最負をすることをいふのである
 ○愚は智慧の足らぬものを愚といふのである、○悪は、わるいこと、いふこと
 なり、○深は、水の底深さをいふのであるが、それから罪の多く大きいのに用ふこ
 と、あつたのである、

(通解) 過があるといふことを知つたならば、早速に改めて仕舞ふべきもので
 ある、一休學問の方法といふものは他ではない、過を知つたらよく改め直し、善に
 遷るといふことを主とするのである、それゆへ學問するものは、平常から絶へず
 この過ちを改め善に遷るといふことに心をつけて、つとめ勵むべきである、して
 また過ちを改めんとするならば、まづ第一に自分の過といふことを知るのが必
 要である、全体他人の過といふものは、ちぎりに知ることが出来るけれども、自分の
 過といふものは、なか／＼知ることが六かしい、それはどういふ譯であるかとい
 ふに、他人を見るには、最負目といふものがなく、極めて公平に見ることが出来る
 から、分明とわかひけれども、自分の身を見るときには、最負目自惚愆なきが中に
 交るものであるから、分明をいで、暗くなるからである、して見れば自分の身に過

がありてもそれを知らないのは、つまり自分を知るといふ智慧の足りない所か
 ら起ることであるから愚といふものである、また過のあるといふことを知りあ
 がら改めぬのは、悪き事であつて、最早や悪人となるのであるから、其の罪とい
 ふものは、深きものである、

(章意) 善に遷るのには過を改むるのに在るので、自分の身の過を改め善に遷
 るのが必要である、過を知りて改めぬのは悪人で、知らぬのは愚人であるか
 ら、どちらも取るに足らないのである、

(文法) 過を改め善に遷るの必要なることを述べたので、みんな前段を承けて
 説いて居る、讀むものはよく／＼前後を照らして見てほしい、是れまでが第二大
 段となるのである、

明鏡も、その裏を照さず、智者も、吾が身を知ることが暗し、故に君子は、先づ吾が身を
 顧みて過を知り、道ある人に交りて、其の諫を聞き、過を改めて善に遷ることを樂み
 とす、是れ學問の益なり、人、些なる贈物を受けてだに悦ばぬはなし、まして過を告げ
 られ、善言をすゝめらるゝをや、過を聞くことを嫌ひ、諫を容るゝ事を厭ふは、不善の

至なり、凡そ人の惡事多き中に、諫を云ふ人を惡み、吾が過を改めざる程、大なる惡はなし。

二十

〔摘解〕 明鏡は、明かにうつる鏡のこと。○照さずば、うつさぬといふこと。○君子は、こゝでは、盛徳の人といつて、道理を辨へて、行の修まつて居る人のこと。○道ある人は、道理のある人といふことで、人にすぐれた賢人をいふのである。○諫は、惡しきことを戒め正すこと。○益は、利益のこと。俗にいふトクといふこと。○些は、僅かのこと。○贈物は、つかひもの、即ちみやげなどいふもの。○善言は、善い言葉といふことで、自分のためにある教訓の言葉のことをいふ。前にいつた諫なぞを指していふのである。○至は、この上もないといふこと。○凡は、すべてといふことで、なんでもかでも一体にといふことである。

〔通解〕 いくらよくうつる鏡でも、裏をうつすといふことは出来るものでない。それと同じことで、いくら智慧のある、道理を辨へたものでも、自分の身を知るといふことは、暗いものである。それであるから、君子といふものは、まづ第一に自分の身を考へて見て、自分に過があるかないかを知り、道ある人と交はりをして、其

の人の諫を聞いて、自分の過を改めて、善に遷ることを楽しいこととするのである。これはみな學問の利益であつて、この上もないよいことである。一人人といふものは、少しばかりの贈り物を貰ひ受けてさへも、喜ばしく思はないものはないのである。まして少しばかりの贈り物どころではない、一生涯の身のためにある過を告げられたり、善き言葉を進められたりするのだもの、この上喜ばしいものはあまいどころか、自分の過を言はれるのを嫌つたり、諫を容れることをいやがつたりするのは、この上もない悪い事である。凡て人といふもの、悪い事の多い中にも、諫をいつてくれる人を悪く思つたり、自分の過を改めないといふほど、大きな悪いことではないのである。

〔章意〕 自分の身を知らないといふのはたれしも免れぬことであるが、それを道ある人に交はりて忠告して貰ふのが必要である。諫を厭ふほど悪いことではないから、人は過を聞くといふことをつとめて求めなければならぬのである。〔文法〕 鏡も其の裏を照らさぬことを譬喩にして、何人も自分で過を知ることばなかく、困難のことであるから、人から諫められるのを容れるべきものだ。

二十一

いふことに落したのである。

〔總説〕 此の文章は學問をするものに必要な心得は、自分のする事又は爲た事が悪いときは、直ぐに改めて善い方に遷るべしといふことを述べたもので、一つの議論文である。して此の文は、三大段に分けるのである。第一大段は、學問は身を修め、といふ初から、一向道に志をかき人なり、まである。此はまた二小段に分けられる。第一大段中の第一小段は、學問といふものは、人倫の道を行ふのが根本である。併し人倫の道も、身が修らなくては行はれるものでない。而して身を修めるには、善に遷り、過を改むるの必要であつて、自ら責めて、人には責めぬのが第一の心得であるといふことをいつたもので、先づ第一番に題目の善に遷るといふことが、學問をするのに、極く／＼の必要であるといふことを説き起したのである。第二小段は、一寸第一小段の裏から説き示したので、上にいふ通りであるから學問をするものが、善に遷り、過を改むるといふことをしさいものは、道に志のないものであつて、學問をする本意に反して居るといふことを説いたのである。此の二小段を合せて第一、大段とするのであるから、第一、大段では、つまり善に遷る

ことは、學問の根本義であるといふことを説いたものである。第二、大段は、過を知らば、其の罪深し、まである。而してまた之を三小段に分けられる。第一小段は、過だと知つたらば早速に改むべきものである。學問をするには他に方法はない。過と知つたらば改め、善に遷るのが主であるから、學問をするものは、平常にこの事を心がけて、勉強すべきであるといつて、第一、大段でいつた善に遷り、過を改む、といふことが、學問の根本であることをいつたのである。二小段は、上にいつた過ちを改むといふことは、第一に自分の過を知るのが必要である。何故ならば、他人の過は知ること容易であるが、自分の過を知るといふのは困難であるから、他人の過を知るよりは、自分の過を知るのが必要なのである。何して他人の過は知り易いかといふに、それは、他人を見るには私情がないから、善いも悪いもよく見える。併し自身を見るには、私情を交ふるからよく見わなくなるのであるといつて、過を改むるためには、自己の過を知るのが必要であるといつたのである。第三小段は、上の二の小段とともに合せて收束したので、自身に過あるのも知らぬのは、智慧の足りない愚者であつて、改めないのは、悪き事であつて

其の罪は深い、自分の過を知らないのは、固より愚であるからよくないが、過あることを知つても、それを改めないのは、悪であるから、尙ほ更らよくない、其の罪は一層大きいといふことを説いて過を改め善に遷るべきことを細かに説いたのである、この三小段を合せて第二六段とするのである、つまり第二六段は、善に遷るには、自分の過を知るべしといふことを説いたものである、第三六段は、明鏡も、から、大なる悪はなし、まで、ある、而して、これもまた三小段に分けられる、第一小段は、明鏡でさへも其の裏を照らすことは出来ない、人もいくら智あるものでも、自分の身を知ることが暗いであるから他人の力を借りなければならぬ、君子といふものはこのことを知つて居るから、自分の身を顧みて過ちのあることを知り、道ある人と交はりて、その人の諫を聞き、これによりて過ちを改め、善に遷ることを樂みとして居る、是れが學問の益で、學問をした甲斐といふものである、といつて、上の過を改むるには、人から諫められるのを聞くべしといふことを説いたのである、第二小段は、人から少しばかりの賁ひ物をしてさへ悦ぶのであるから、學問をする根本たる過を改むるための善言を受けたら、尙

ほ一層悦ぶべきである、もしその過をいはれ、諫めらるゝことを嫌つたり厭がつたりするのは、此の上もない不善である、といふことをいつて、人の諫を嫌ふべからざることを説いたのである、第三小段は、いはれて悦ばなければ、あらぬ諫をいつて呉れる人を悪んで、自分の過を改めないほど大なる悪事はないといつて、諫は必ず悦んで聞かなければならぬことを説いたのである、これか第三六段の結末であつて、また全体の收束である、つまり第三六段はこの三小段を合せて過を知り、善に遷るには、他人の諫を用ふべしといふことを説いたのである、以上三六段を合せて、善に遷ることを説き盡くして居る、第一に善に遷るのが學問の根本であつて、過を知るのが善に遷る根本であるといつて、其の又過を知るには、人の諫を聞くを必要とすることとする事を順次に説いたのである、讀者諸君もこの益軒のいつて居ることを信じて、學問をして行けば、立派な人物となることが出る、たゞ坐上の空談で、學者の四角張つた説法だと思つて、馬耳東風に聞き流す、いや讀み棄てゝは、益軒のいふ悪事多き中の最も大なる惡を犯したものである、故にこの文によりて、文章の順序を知ると、もに、學問の順序を知つたな

らば、其の効能は、賣藥の効能書のやうに並べずとも、實際の効能が直ぐに現はれるであらう、

二十六

永田徳本

永田徳本といふのは、人の姓名であるが、この人の事を書くのであるから、姓名を題としたのである、詳しいことは、本文を読む内に解るが、この姓名は、ナガク、トクホンと讀むので、訓讀するのではない、

此の文は、本朝傳記といふ本に出て居るのである、面白い事柄であるから、こゝに解釋して示すことゝしやう、文章の上からいへば、さう大したものではないが、たゞ事柄が面白いから解釋するのである、

徳本は三河の産あるが、久く甲斐に住みたるを以て、甲斐の徳本と呼べり、氏を永田號を乾堂と云ひ、醫を以て業とせり、夙に富士及び木曾の山中に入りて藥を採來りて、これを患者に用ふ、されどその用方、世の常ならざりければ、人之を知ること能はざりきとぞ

〔摘解〕 産は、出生のことであるから、三河の産といへば、三河の國で産れたとい

ふことゝなるのである、○氏を永田號と乾堂と云ひは、氏を永田といひ、號を乾堂と云ひとかくべきを、上のいひを略したのである、何故なれば、下に、云ひとあつて重複するからである、○業は、家業營業の業で、早くいへば商賣のことである、併し商の字を付けると妙に思ふだらうが、生活をするための仕事である、○夙には、早にといふこと、人のあまり行きもせぬうちからといふことで、疾にからといふこと、俗にいふトツクニからといふことである、○採來りては、取つて來てといふこと、○これをば、其の藥をといふこと、これといふ代名詞は、藥をさしたのである、○患者は、病人をいふ、病氣を煩ひ患ひて居るものといふ意味から來たのである、○されどは、さうであるけれどもといふことで、ダガとでも、クレドモとでもいふ語である、○用法は、用ひ方といふので、つまり今の處方のことである、○世の常は、世間の平常といふ字で、だれでもする普通一般といふこと平たくいへばナミといふこと、○ければは、カラシテといふ語である、○きは、過去を表はす助動詞である、何々であつたとかいふ々の意である、○どきは、といふ話であるといふとき、に用ふるのである、俗にいへば、何々だトサアといふトサアに當るのである、

二十七

〔通解〕 徳本といふ人は、三河の國の産であるが、久しい間甲斐の國に住んで居るものであるから、甲斐の徳本と呼んで居る。氏は永田といつて、乾堂と號して、醫術を業として居た。この人疾から富士山や信州の木曾山などの人も行かない處へ行つて、藥になる草なせを取つて來ては、それを病人に飲させ用つて居た。けれども、其の處方が普通のとは違つて居るからして、だれもその處方や何かを知る事が出来なかつたといふことである。

〔文法〕 徳本の生業を叙べたのであつて、一小段とする。

徳本、常に藥賣る事を業とし、藥籠を擔ひて、甲斐の徳本、一服の價十六文と呼びつゝ、往來せり、この藥を服する者は、いかに沈痼癘疾も、癒えぬはなしとて、大に人に重せられぬ、

〔摘解〕 藥賣は、藥を賣るといふことで、をといふ且爾波を略したのである。○藥籠は、藥を入れる物である。今でも富山の反魂丹賣りの背負つて居るのと同じである。○擔は、カツグとも讀むが、背負ふことである。○一服は、一度飲むだけといふ。今でも藥屋では一服と云つて居る。○價は、値段のこと。○服するは、飲むこと。○い

かなるは、どんあといふこと。○沈痼癘疾は、持病でなほらない病氣をいふ。不具にでもなつて仕舞ふやうのものをいふ。癩病、梅毒、肺病などいふ類を指すのである。○癒えぬはなしは、なほらないものはないといふこと。癒えぬは、イエヌと讀む。○さては、といふのでといふこと。○重せられぬは、人から敬はれたといふことである。

〔通解〕 この徳本といふ人は、平常は、藥を賣る事を業として居たものであるから、藥籠を背負つては、甲斐の徳本、一服の値段十六文といひながら、彼方へ行つたり、此方へ來たりして、往還を歩いて居た。ところがこの徳本の藥を飲むものは、どんな重いおはらない病氣でも、癒らないといふことがないといふので、大層人々から敬はれて居た。

〔文法〕 徳本の藥賣る様子を書いたのである。これを二小段として、一小段と合せて第一大段とする。徳本の出生、生業、平生の行事を叙べ、世間の評判をも併せて叙べたのである。これで徳本といふ人のことも、大抵分つたから、次から生きて居る内にあつた事柄を少しく書くのである。徳本といふ人は、どんあことがあるか

といふと次の通りである、

徳本、江戸に来れるをり、將軍恙ありて、諸の侍醫藥を進められぬ驗なかりけるを、或人の薦にて、徳本の藥を飲みて、忽に快癒せしかば、將軍大に之を賞して、重く物を賜れるに、徳本は十六文を受けたるのみにて、その他の物は、一切辭して納めざりき。

〔摘解〕 せりは、折で、時といふこと、○恙は、病氣のこと、一体恙といふ字は、昔し旅をするとき、宿もなく行く先くで野宿したものであるからそれがために、毒虫があつて、身を害されることがある、その毒虫の名であるといふ説があるし、また恙は憂といふことで、心配する意味で、病人を患者といふのと同じに、憂といふことで病氣のことにするといふ説もある、こんなことはどうでもよいが、たゞ病氣のこと、知つて居ればよろしい、○諸は、いろいろ多くすべてといふこと、○進は、差上げること、下のものから、上のものに差上げるのをいふ、○どは、反語でければといふこと、○驗は、効驗のこと、即ちキ、メといふこと、○けるをば、たのぞといふこと、○薦は、今俗にいふ、誰々にス、メラレテ何々をしたといふ、ス、メの義である、○忽は、直きといふこと、○快癒は、全快のこと、病氣の平癒したのをいふ、○かはは

からといふこと、○賞しては、御褒めになつて御喜びになること、俗に御褒美といふこと、○重くは、大層といふこと、丁寧の意を含んで居るのである、○一切は、スツカリといふこと、俗にソナナ事には一切構はをいふのと同じである、○辭は、ことばりすること、○きは、過去を表はす助動詞で、何々しなかつたのと同じ意である、

〔通解〕 徳本が江戸に来たとき、徳川將軍には御病氣であつて、多くの御傍に付き添ひて居る醫者などが、いろいろの藥を差上げたけれども、少しも其のきゝめがなかつたのを或人が、徳本の藥がよからうとすゝめたゆへ、其れを差上げた、そこで將軍がそれを御飲みになると、ちきに御病氣が御全快とあつたから、大層喜びになつていろいろと御褒美物を下された、ところが徳本は、藥代として十六文を受け取つたばかりで、その他の物は、一切ことばりいつて納め取らなかつた、

〔文法〕 これは徳本の藥が効能のあること、性質の有様とを事實で示したのであつて、第二大段とする、前段の「甲斐の徳本一服の價十六文」とあるのに應じて十六文を受けたるのみにて云々といつたのである、

將軍ますく、徳本を重じ、強ひて徳本に、欲する所を言はしめしに、徳本答へけらくかく強ひたまへば、申し候ひあむ、余が友に家なきもの、候ふ、一所の土地と家とを賜りなば、いと辱く存じ候はむ、と云へるにより、甲斐の山梨郡の内ある一區に、金若干を添へて賜りにければ、徳本厚く謝して、土地も金も、すべて之を彼の友に與へて私せず、その身は、もとの如く復藥を賣りありきけり、

〔摘解〕 私せずは自分獨のものにしないといふこと、

〔通解〕 そこで將軍は、ますく、徳本を重く信じ給ひて、無理に何が欲しいかいへと言はせたときに、徳本は、この通に無理にたつてと仰せられるならば、申し上げませうが、實は私の友人に、自分の住むべき村家もない、哀れなものが御座りますから、何處か一ヶ所の土地と家とを下し置かれたらば、此上もない有難いこと、存じますといつたので、甲斐の國山梨郡の内の或一區の土地に金をいくら添へて下されたから、徳本は厚く御禮申して、土地も金も、みなその友達にやつて、少しも自分のものにしなない、そこで自分は、もとのやうにまたく藥を賣り歩いて居た、

徳本、後に甲斐に來り、程なく信濃に赴き十四年ばかり経て、復歸來り、甲斐にて没せり、その墓は今尚ほ雨宮作左衛門が持てる、葡萄島の内遣れりぞぞ、

〔通解〕 徳本はその後甲斐の國に來て間もなく信濃の國に赴き、十四年ばかり経てから、また甲斐に戻り來て、甲斐で没した、その墓は今でも、雨ノ宮作左衛門の持て居る葡萄島の内に遣つて居るといふことである、

土佐日記

いまより土佐日記の解釋をしようとしてその方針はなるたけかんたんに、うゐまなびの輩に此日記の文義をしらしむるを主旨として其言句は現今ひろく世に行はれ、通し易き辭を用ゐますこの日記は他の物語ぶみなどに似すことばすぐれて、みやびやかに雄々しく書きなしたる文であるから昔より今日に至るまで弘くもろくの學校の教科書に用ゐられてゐるのである

此書は記の貫之朝臣が土佐の國守たる任期が過ぎ満ちて京都へ歸へらるゝとき其出立より京都へ着するまで途中にて何くれとなく書き付けられたる日記

であるから土佐日記と名を付けられたのである

男もすといふ日記といふものを、女もしてみんとてするなりその年十二月の二十日あまり一日の日の成のときにかごです、そのよしさいかものにかきつく

〔摘解〕 男は男子の通稱○すといふは爲すの義、故に男もすることは夫の漢文もて、書き記す日記を指すことである○日記とは日々の出来事を記せるもの、稱○女もしてみんとてするなりは女ながらも旅路の日記を、試みに編んで見ようとの意である

〔通解〕 以上此日記の書き様をいうたのであるが元來この日記は貫之のぬしのみづからかゝれたるものであるが假名文なるを以てわざと女のしるせるさまにいひなして書き綴られたのである

それのとはは某年にて年號のさだかならざる場合に用ふるを、常とす然れども爰にては實に朱雀天皇の承平四年即ち紀氏が土佐守の任はて、京へ歸へらるゝ時の年であるけれど、この日記を女のものしたる趣にせられて記者の名をだに記されぬこと故にしつかりと指さないで、ほんやりと某年とは記れさたるの

である、十二月の廿日あまり一日は十二月二十有一日である、日とは其日の、ことなりぬのときは今の午後八時頃に當る、かごです、とは門出とかき即ち家の門を出で旅途につくをいふなり、そのよし、とは土佐の國より京へ歸る旅路の有様を云ふ、いさいかものにかきつく、些少の義にて、すこしそのありさまを書き、試むると云ふ意である

〔文法〕 以上は本書の作意をことばしたのである此日記は貫之のぬし、みづからかゝれたるを、他の女の書けるさまにせられたるは、一の文の作匠であるあるひと、あがたの四とせ五とせはて、れいのことども、みなしちへて、げゆなどとりて、すむたちよりいて、舟にのるべき所へわたる、かれこれ、しる、しらずあくりす、年ごろよく、しつる人々なん、わかれがたくもひて、その日しきりにとかくしつゝの、しるうちに、夜ふけぬ

〔摘解〕 あるひと○貫之ぬしみづからのことなれども、女のかけるさまにせらるれば、かくおぼめかして言はれたのである○あがたの四とせ五とせはて、はあがたは、縣なり國司の其任國をさしてあがたと云ふ○四とせ五とせは、四年五

年なり、はてしは、終ること、

三十六

〔進解〕 紀氏が延長八年土佐の國司としてその國に下り、今年承平四年其任がはてし京へ歸るのであるからかように云ふたのである。れいのととも、前任の人後任の國司へ國務をゆづり、一切の記録をわたす事どもを云ふのみなしおへては、皆な爲し畢る義〇げゆは、解由とかく即ち、とくるよしといふ意でありて、こゝにては、正税公廳など御倉の公物を改め渡して後任の司より算勘とこほりなしとの受取書を貫之ぬしが受取るを云ふ〇すむたちは土佐國長岡郡なる國司の住む館をいふ〇船にのるべき所へわたる、牛老川の船にのるべき場所へ行くことである〇しるしらぬちくりすは、知已も不知已も多くの人が見送たといふことである〇としごろよくぐしつる人々、としごろは年來なり、こゝにては其任期の間をいふ〇よくぐしつる人々は、格段に召仕はれて貫之の許へ親しく出入せし人々を云ふ〇わかれがたくおもひて、再び逢ふまじとてなごりを惜むの義〇とかくしつゝ、荷物を船に運び且つ離別の宴をはるなど、とやかくするをいふ〇のゝしるうち、がやぐ騒ぎ立つほどにといふ意である。

る

二十二日いづみの國まで、たひらかにとねがいたつ、藤原言實ふなぢなれと、うまのはなむけす、かみなかしもゑひすきて、いとあやしく、しほうみのほとりにてあざれあへり

〔解通〕 いづみの國、畿内の和泉國である〇たひらかにとねがひたつ、京まで歸る人であるから都まで無難にと願ひて出立せられたのである〇藤原言實……此人を橋守部氏は後任の司の屬官なりと記されたるが、いかにや〇ふなぢなれと、うまのはなむけす馬のはなむけは、餞別といふ義なり、むかしは、旅する人の乗りたる馬の鼻を彼方へ向けて恙なくとよ、など云ひしが、後には酒をのませ、物をおくるを馬のはなむけすと云ふのである、これは船路といふ辭に對して殊に馬といひて之も諧謔にせられたのである〇かみなかしも、上中下の身分の人々をいふ〇ゑひすぎて、酔過ては、いたく酔ひたることである〇いとあやしく、はあやしは、不可思議といふ意〇しほうみのほとりにてあざれあへり〇しほうみのほとりとは、紀氏の船出する場所をいふ〇あざれあへりは、酒に酔ひ過ぎて狂ひ戯れる

三十七

さまを云ふ○あされは、もと魚肉のあざれたることより來たれる語である、さてこれを人の上に云ふは亂れたるさまをさして云ふのである、こゝにては潮海の邊にと殊更にかひて其鹽のある海邊にても、人はあざれあへりと、これも戯れにいふことばである

三十八

二十三日、八木の康教といふ人あり、この人、くにかならずしもいでつかはるゝ人にもあざりき、これぞたゞしきやうにて、うまのはなむけしたるかみがらにやあらん、國びとのこゝろのつねとして、今はとみえざるを、こゝろあるものは、はぢすになんきける、これは物によりてほむるにしもあらず

〔通解〕 八木の康教の傳記は詳かならざれども、土佐の國の人であらう○この人、くにかならずしもいでつかはるゝ人にもあざりき、この人もと身分貴き人であるから、國司の廳などに召し使はるゝ人ではないと云ふ意○これぞたゞしきやうにて、うまのはなむけしたるかみがらにやあらん、國びとのこゝろのつねとして、今はとみえざるを、こゝろあるものは、はぢすになんきける、これは物によりてほむるにしもあらず

やあらん、即ち國司の治め方のあしき故によるのであろうとの意○國びとのこゝろのつねとして、凡て國人の人情は○今はとみえざるを、今ま別るゝと云ふ時には送り來るもの見えざるもので、あるまことに薄情なものだのに、こゝろあるものは、有志者は○はぢすになんきける大かたの風俗にそむきて他人より誹謗せらるゝを耻ずして見送りに來てくれたよと云ふ意なり○なんきけるは來ると云ふ意を強く言ひあらはす場合に用ゆ○これは物によりてほむるにしもあらず、かく八木の康教を賞賛するは其饒別の贈物のよきによりて譽るのではない、全く其人の厚情を謝すると云ふ意である

二十四日、講師うまのはなむけしにいでませり、ありとあるかみ、しもわらはまで、あひしれて、一もしをだもしらぬものしがあしは、十もしにふみてぞあそぶ

〔通解〕 講師とは住古は國毎に國分寺といふものがありて、其住職を講師といひて、國內の僧尼の司率とし、兼ねて教育の任をまはしてあつたか、この講師とは土佐の國の國分寺の講師である、いでませり、は參られたりといふこと、今の俗語の暇請に御出なされたりと云ふと同じことである、○ありとあるかみ、しもわら

三十九

は、まては、總体身分の貴き人も卑き人も童兒まで〇多ひしれて、其席にある人は送別の酒に辭ひくづれて、正体もなくなりての意なり〇しれては痴者といふ意にて夫の多ひてあるかしうなるといふこと、

〇一もじをだにしらぬものしがあしは十もしにふみてぞあそぶ〇此の例の戯諧の文匠にて書かれたのである、夫の諸方より贈られたる賸物の酒杯を飲み且食ひて酔ひしれたりしかば、足もとがさだまらずしどろなるをいふ意である、岸本氏の考證に曰く、ものしがの「し」文字は「ら」の誤りにてものらがであるとか加納眞淵翁は、すてにも「ら」がとして註を下されたけれど、是は助字であらうやは「し」としてよよむがよからうと思ふ

二十五日、かみのたちより、よびにふみもてきたれり、よばれていきて、日ひとひ、夜ひとよ、とかくあそぶやうにてあけにけり

〔通解〕かみのたち、よりは國司の館をいふ〇即ち紀氏に替はられたる新任の土佐守の居所より〇よびにふみもてきたれり、新任の土佐守の許より書狀をもて紀氏を呼びに來れることである〇よはれていきて、呼ばるゝまゝに行きた

りといふこと〇日ひとひ、夜ひとよ、終日終夜なり〇とかくあそぶやうにてあけにけり、年ごろ住みてありた館であるからとかく心やすく、且つさまぐの待遇にて、深く興に入り、遂に夜の明くるまで、遊びたるといふことである、この廿五日は、ちようど節分に當りてあるから、されば世の習慣として當日は寝ぬべき夜ならねば、さる方に取そへて互に心うちとけ、遊びつゝ、夜を明したのである

二十六日、なほかみのたちにあるに、昨日の如くに今日も猶ほ新任の土佐守の許にありたり、たてゑあけていひけり、やまとうたあるじもまらうども、こと人もいひあへり

〔解義〕なほかみのたちにあるに、昨日の如くに今日も猶ほ新任の土佐守の居所にあるにといふこと〇あるじし、は饗應なり、主人の賓客に對して馳走するしわざなどをいふ辭よりこれが轉訛し來たのである〇のゝしりて、聲だかに、呼びさわぐをいふ〇をのこらまでにもかつげたり、をのこは從者共である品物を與へとらすことをいふのであるさて昔は他より物を貰へば必ずうちかつぎて禮をする故に、人にあたへるものはなにしながらもかつぐものといふて

ありたのであるこれよりうつり來りて、總て物を與ふることをば、かつげものといふたのである。○からうたてゑあけていひけり、からうたは唐詩である。そこで詩を高聲にて吟じたといふのである。○やまとうた、和歌のことである。○あるじこゝのあるじは主人にて今の土佐守のことをいふ。○まらうど、稀人の義にて客人のことである。即ち紀氏自身のことである。○こと人もいひあへり、こと人は、他人のことにて、主客の外その席に列せる客をいふ。主人客人は元より其離別の宴に臨みたる他人まで和歌を讀みたと云ふ意である。

からうたとれにはかゝず、やまとうたあるじのかみのよめりける

「みやこいで、君にあはんとこしものを、こしかひもなくわかれぬるかな」となんありければ、かへるさきのかみのよめる

「しろたへの波路をとほくゆきかひて、われににべきはたれならなくに」とかくいひて、さきのかみも、今のももろともにおりて、さきのもいまのも手とりかはしてゑひごどに心よげなることとしていてにけり

〔釋義〕 此日記は女の書きたる体にしたのであるから、詩などは、かゝぬとゆは

れたのである。○やまとうたあるじのよめりけるは、新任の土佐の守の作りて讀まれたるは「みやこいで、云々の歌である。此歌の大意は京を出て、より、貫之の君に逢ふとそれを樂みに思ひて來たのに、かく遙々と此土佐の地まで來た甲斐もなく速かに別るゝことよ、さてもゝとの意である。○かへるさきのかみ、紀氏自身のことである。しろたへの云々さて此歌の意は遠く且おそろしく海路を越へ來りて苦しき目を見たる我身に似たる人は誰ならぬ外の人ではない。即ち新任の土佐の守である。さてもゝ公務の多忙にして心配なるが思ひやらるゝこの意。○しろたへ云々……は波の枕詞なり。○ゆきかひ……は往交といふ辭にて我と他人と交替するを云ふ。○「ならなく」はならぬの延詞である。強く云ふときに云ふのである。○さかしきも、なかるべし、こと人のよみた歌もあるけれど、秀作のものはない。○とかくいひ、主客打とけて、とやかくと種々のことをいひてといふ意。○さきのも、前の土佐守即ち紀氏なり。○いまのも、新任の土佐の守をいふ。○もろともにおりては、紀氏かこの館を出て、歸るとき新任の主人も階上より下りておくることである。○手をとりかはして、手を握ることを云ふ。○ゑひごどに心

よけなることとしていでにけり、この一句は首途の祝言であるその意は主客もろともに酒興に入りてとりづに芽出度首途の祝言などいひかはし連れたち出でたといふこと〇ゑひごは酔言なり〇心よけは機嫌よきといふことである二、十七日大港より浦戸をさしてこぎいづ、かくあるうちに、京にてうまれしおんな子こゝにしてにはかにうせにしかば、このごろのいでたち、いそぎをみれど、なにごともえいはず、京へかへるに女子のなきのみぞかなしみこふる、ある人々もえたへすこのあひだに、ある人のかきていませるうたみやこへと思ふもの、かなしさはかへらぬ人のあればなりけり

〔解義〕 〇大港より浦戸をさしてこぎいづ、これは土佐の國の地名大津は長岡郡浦戸は吾川郡にあるこれらの處を舟に乗りて出でたと云ふこと〇かくあるうちには、かく旅立たんと支度する間〇こゝにして、にはかにうせしかば、此處にての意ではない土佐の國にてうせたと云ふ意であらう

見聞抄に云く、こゝにしては此國にてうせたるにて京へのばりきはではあるまい何故なれば京へのぼるとき京より同道して來た女子のことを思ひいで懷舊

の心尤もあはれと思はれたのである即ち上洛ぎはになりて連れ歸ることを俄かに思ひ出だされたのである〔此説尤も信せらるゝと思ふ〇いでたちいそぎ旅立の用意支度をいふ〇なにごともえいはず、何事もいはないと云ふ意である〕〔えと云ふ字を上に加ふるは古文に多く見る所でありてあへて云ふことをようせない即ち言ふにも及はないとの義である

〔通解〕 さて、こゝの總体の意味は、旅立の用意支度を見れど、京へ歸るを嬉しと勇むこゝろもなく、たゞ年ころ育てし女子のうせたることを悲み思ふのみにて、何事も手につかずといふことである、京へかへるに女子のなきのみぞかなしみ戀る、京へ歸るはうれしきことであるけれど、みやこに歸らうと思ふにつけても、反て悲み戀ふるは歸へらぬ女子のことのみかなしく思ひ出されとの意、ある人々もねたへず、眞之のみでない他人までもかなしみに堪へずといふことなり〇このあいだに、あいだは中間に事を起す語でありて其義に因てと同じく、即ちこのなげきの程にといふ意である〇みやこへと思ふもの、かなしさは……、この歌の大意は京へ歸らんと出で立は、嬉しく樂しき極まりであるけれど常にかわり

四十六
てものかなしきことは、唯だ死して共に歸らぬ女があるからであるといふ意である

またあるときには、

あるものとわすれつゝなほなき人を、いつちとどふぞかなしかりける」といひけるあひだに、かこの崎といふ所にいたるに、かみのはらから、又こと人これかれさけなごもておひきて、いそにおりゐて、わかれかたきことをいふ。○かみのたちの人々の中に、このきたる人々ぞ、心あるやうにはいはれはのめく、かくわかれかたきひてかの人々のくちあみもろもちにて、このうみべにて、になひいだせるうたをしと思ふ人やとまるどあしがもの、うちむれてこそわれはきにけれ」といひてありければ、いそいたくめで、ゆく人のよめりける

「さをさせそこひもしらぬわたつうみの、ふかき心を君に見るかな」といふあひだに、かちどりものゝあはれもしらで、おのれし酒をくらひつれば、はや

くいなんとてしほみちぬ、風もなきぬべしとさわげば船にのりなんとす

「解義」あるものとわすれつゝなほなき人を云々「いつち」といふ辭は何處にと

いふことで俗語で「ドコドコ」といふ辭と同じことである

さて此歌のころは彼の死して今は此世になき女の子をまた此世の中に居るものじやと思ふて死したとをわすれて、あの子はどこに居るかたづねることがあるがまことに思ひ出すたびごとに悲しきものであるといふことである。○かこのさきといふ所にいたるには鹿兒の崎は天津の西にあるこのところまで来たことである。○かみのはらからは、かみの國守のことで即ち新任の土佐守のはらからとは兄弟といふことである。○又こと人これかれほかのこれかれの人をいふ。○いそにおりゐて、は潮海の邊にて船より上りて磯邊に降りることである。○かみのたちの人々の中には新任の土佐守の屬官中に於ての意である。○このきたる人々ぞ心あるやうにはいはれはのめく、は心ざしかあるからにて即ちあつさまごころがあるからそゆけしきが顔色にうすく見へる。漢字では髣髴といふとにあたる。○さて此大意は土佐守の屬官の中にて此跡を追ひて来てくれた兩三輩のみは、厚き信切心があるやうにて船中の人々もウスくさゝやき合ふたとの意である

眞淵氏曰く心ある様には歌よむ心あるをいふはのめくは、そのけしき見えてほこりがなるをいふなりと

春海翁云く歌よむ心あるをいふにはあらず心ざしあるやうにいひなすなりと余は春海翁の説に左袒す 何故なれば上文より引つゞけたる詞の意味に通ずるからである○かの人々のくちあみもろもちて云々

かの鹿兒の崎まで追ひ來たりし人々がといふ意○口あみは大綱のこと○もろもちは、諸持といふことで、いと大きな引綱を諸人がかりてになひもちて引あぐる事であるが さて此文の意は海邊にて目にふれる綱を取りて譬へにひき戯れたのである即ち歌よむ口のおもく諸人互にたすけあふて辛ふじて歌をよみ出せること宛かも大なる引綱を諸人して引き寄す如くに力をつくしたことを例の諧謔文にてかいたのである、○おしと思ふ人やとまるとあしかもの云々おしは惜しきの義であるけれども爰にて此駕の意をもたせてあるその下の句に鞞鴨といふことを讀みて照應せんがためである、又あしかものは打むれてといふ辭の枕詞であるさて此一首の意は別れ惜しいと思ふ人がもしや留まるか

我々は鞞鴨のように、この崎まで群らがり飛びて慕ひ來たるといふたのである、○いといたくめで、は甚だ感賞してといふこと、○ゆく人は紀貫之である○「ささせどそこひもしらぬ云々」そこひもしらぬとは際涯も知れぬと云ふ意 ○わたつみは海を守り給ふ神であるが轉して唯海のことをいふのであるさてこの歌のこゝろは掉させ底の限りは知られない海のように人々の深切の心は即ちこゝろで送り賜はる君方によりて見ることだわいさてもく深き志の人々であるよといふ意○といふたびだに、とはそのようによみかわすあひだにと云ふ意である、○ものゝあはれもしらでは、かく我々は互に再び逢はれぬ別を悲みておるけれど、船子共は更に其情を酌み知らず自身さへ酒をのめば早く船をこぎ出ださう潮が満ちた、ほどなく風も吹くからはやく船に乗り給へよと騒ぐから心ならずも船に乗りうとすといふ意である

このおりにある人々おりふしにつけて、からうたども、ときに、つかはしきをいふまたある人、にし國なれど、かひうたなぞうたふかくうたふにふなやかたのちりもちり、そらく雲もたいよひぬ、とすいふなるこよひ浦戸にとまる藤原のときさ

ね、たればなのすゑひら、こと人々おひきたり

(解義) ある人々は、貫之ぬしを送りに來たる人々のこと。○おりふしにつけては、送別の折にかなひたること。○ときにつかはしきをいふは、唐人餞別の時に陽關などいふ詩を吟ずるが如くに唐詩の送別に適したるものを吟せしといふ意なり。○かひうたなどうたふは、甲斐歌とは元來甲州は東國である此處は西國であるに東國の歌を歌ふたと例の紀氏の文匠である。○ふなやかたのちりもちりは、こは劉向列傳に虞公發聲清哀蓋動梁塵とある句を引かれたるなり。○うらゆく雲もた、いよひぬは、こは列子に秦青が聲振林木響遏行雲とあるより來れる句である、たればなのすゑひらは、橘の季衡にて土佐の國人であるらう。

二十八日、うらどよりこぎいで、大湊をおふ、このあひだにはやくの、かみの子、やまぐちのちみね、さげよきものどももてきて、ふねにいれたり、ゆくのみくふ。

(解義) うらぎは、浦戸のとにて吾川郡の海に出でたる處にあり。○大湊は、長岡郡と香美郡との間に在る、大湊の泊りを追ふて舟を漕ぎ出せしとの意。○はやくのかみは、前の土佐の守のと。○よきものは美物にて珍美の肴などを云ふ。○ゆく

のみくふ、舟の進行する間に飲食せしとなり

二十九日、おほみなどに泊れり、くすし、ふりはへて、とぞ、白散さけくはへてもてきたり、こゝろさしあるに似たり

(解義) くすしは、醫師なり、こゝに云ふ「くすし」は朝廷より一國に一人く置きたる醫官なり。○ふりはへては、明日は元日であるから態々來りてとなり。○とぞは、屠蘇のこと。○白散は屠蘇と同じく正月元日に用る藥種用品である。○こゝろさしあるに似たりは、醫師の藥酒を持ち來るは珍らしくもあらねど明日の元日を忘れずしてかく用意を致したるはさてもよく氣が付きたること、なり。

元日、なほ同じ泊なり、白散を或者夜の間とて舟館にさしはさめりければ、風に吹きながさせて、海にいれて、え飯ますなりぬ。

(句解) 白散屠蘇と同じく正月元日に用ゐる藥酒、病氣邪氣を消すというて、除夜袋に容れて井戸の底にかけ、元日、酒に浸して今も、元日に飲む。○夜の間とて夜の間のことなれば、○舟館、舟の屋根。○さしはさめりければ、差し挿んで置いたから。○風に吹きながさせて、風に吹きやられてといふこと、餅し或本には、吹き鳴らさせ

て、といふやうに書いて、紙や何かに包んだ白散の薬が、風にバラ／＼吹き鳴らされるのだと、解釋をしたものもあれど、唯吹きやられたといふ丈で、澤山だ、白散の包を風に吹き流させたのだ

五十二

〔解義〕 元日は、永平五年の元日だ、昨夜即ち大晦日の夜は、同じ土佐の國、香美郡の大湊に碇泊したが、醫者がわざ／＼尋ねて来て、屠蘇白散にお酒までも持て來られたけふは元日だから舟も出さずに、同じ大湊に碇泊して、目出度新年を迎へやうと、思つて居つたのに、かの屠蘇白散を惜い事に、誰か、井戸の底にかける代りに洒落て、舟の屋根の軒の端に、さし挿んで置いたものだから、風に吹きやられて海の中に吹き込まれ、わのお醫者の志も無益となり、トウ／＼飲む事が出来なかつた。

芋も滑海藻も齒固もなしかやうのものも無き國なり、もとめしもおかず。

〔句解〕 齒固、鏡餅のこと、年が始めに少し齒にこたふるものを食うて、わが齡を固むる祝ひごとにするのだ。

〔解義〕 前に云つたやうに、白散の薬、海に吹き込まれたからせめては、例のお祝

ひに用ふる芋か海菜か、また齒固でもあつたなら慰みもするのにな、こんな物でもない國だのに、心付きもしなくて、取り寄せても置かなかつたのは、甚だ残念だ。唯、押年魚のくちをのみぞ吸ふ、此吸ふ人々の口を、押年魚若し思ふやうあらむや。

〔句解〕 押年魚一杯、鹽年魚一杯など云つて、やはり元日にたへるもので干し固めた年魚のことである。

〔解義〕 無くてはならないものは、一つもなくて、たゞ鹽をして押し固めた年魚を仕方なしに食うとしたがなか／＼齒も立たず、其上年魚の數も少くて、人に分けるほどもなく、やう／＼お頭を頂戴したから固くて／＼たまらないで、たゞ嘗めて吸るばかりだ、かやうに、船中の者が隔てなく、打ち解けて、吸ひ合ふてゐる人々の口を、此押年魚がもしか、知る事が出来たなら、否、たよまか、良よまか、伺とか言うであらうか、どうだらう。

今日は、京のみぞ思ひやらるゝ九重の門の尻久米繩の、鱈の頭、柁が如何にとぞ言ひあへる。

〔句解〕 〇九重の門、天子の御宮の御門、〇尻久米繩、注連繩、〇なよし、ぼらの子。

(解義) ほんとに今日は、元日だから、京都の事ばかりが思ひやらるゝ。其中にも、宮城の御門のシメナハの飾の、ホラのアタマや、終なんどのやうに、皆物毎新しうなッて居るだらうかと、船中の人々が話し合ッた。

二日、なほ、大湊にとまれり。講師、物、酒、おこせたり。

(句解) 講師は、十二月廿四日に、餞別して呉れた國分寺の住職の事。此時分は、朝廷より國々の僧尼の監督をするものを擇んで、任命したもので、即ち是を講師といふのである。○もの、食物などのこと。

(解義) 矢張り大湊に泊ッて居た。ところが、以前の講師が、また種々の食いものや酒などを持たせて、贈ッて呉れた。

三日、おなじどころなり。若し風浪のなほ暫しと惜む心やあらむ。こゝろもとなし。

(句解) こゝろもとなし。覺束なく、あやふやな。他の注釋には、あやにくな、とか、待遠な、とかいふやうな風に解すれど、余は少し考ふる處があるから、右のやうに解する。

(解義) くる日も、舟を出すことが出来なくて、また同じ港に泊らねばならぬ。

とは、情ない事である。何故だらう、ヒョット此私が船にのると見て風や波が別れを惜んで、荒るのではないだらうか、しかし、どうだか分らない、それは惜まれるほどの者でもないから、そうでも無いだらう、あぶないものだ。

四日、風吹けば、え出で立たず。昌連酒よきもの奉れり。かうやうの物持て來る人に、なほしもえあらで、聊かわさせさすものもなし。賑はしきやうなれど、負くる心地す。

(句解) なほしもえあらで、猶そのまゝでは、よう過ごされ悪う。○かうやう、かやう

(解義) 又今日も舟が出惡うで、泊ッて居る。退屈を、思ひやッて、昌連といふ人が、酒などを船中に入れて呉れた。すべて、かやうに物を贈ッて呉れる人へ、其儘でも捨て置き難いと、心には思ふけれど、舟の中のことだから、いさゝかなる返禮をも命合ける物もなうて、止むを得ず、受くるばかりである、せめてと思ッて、酒など出して、一時は賑やかなやうにもあつたが、それでも、何人だか、何處かにひけめがあるやうである。

五日、風なみ止まねば、猶同じどころにあり。人々絶えず訪ふらひに來。

(解義) けふも、風が吹き止まぬから、やはり同じ所に居るのである。訪問の人々は

絶間なく来る。

六日、きのふの如し、

七日になりぬ。同じ海にありけふは、青馬を思へど、かひなし、たゞ波の白きのみが見ゆる。

(句解) ○青馬、正月七日に青馬を見れば、年中の邪氣を除くといふことを、昔は言つたのである。

(解義) もう七日になつたが、まだ同じ所に居るのである。けふは、京都では、白馬の節會と言つて、青馬を見るのが例であるのに、思ふばかりで、致し方がない。青いところか海の上は、波が真白である。

かゝる間に、人の家の池と名ある所より、鯉はなくて、鮒より川のも海のもの、こともをも長櫃に荷ひついで、おこせり。

句解、○ごとも、外のもの、

(解義) 青馬どころか、波の上は真白だなど、駄沙然れて居るところへ、池所の名から、鯉ではない、鮒を始として川の魚といふ魚を、澤山また海の魚を澤山、其上ま

た、外の物をも、長持に入れて、どん／＼荷つてやつて来た。

若菜籠に入れて、雉など花につけたり、若菜を今日を知らせたる歌なり、其うた、

浅茅生の野邊にしあれば水がなき

池に摘つる若菜なりけり。

(句解) ○浅茅生ッバナといふ草の生へて居るといふ意味である。○若菜、七種のわかな。正月七日、養にして食へば、萬病が無くなるといひ傳へて居る。

(解義) 右の魚の外に、また七種を籠に入れて、雉子などを梅の花につけてあつた。けふは、青馬も見ることが出来なから、七日の様子も無かつたのに、若菜が有つて呉れて始めて七日である事を知らせて呉れたといふものである。而して、是に添へた歌がある、その歌は私はつばなの生へて居る野に住んで居りますれば、今日のお祝のしるしに、是は水も無い、私の居る所の名の池で摘みました。若菜で御座ります。聊かながら進上仕ります。

いと、をかしかし、この池といふは、所の名なり、よき人の男につきて下り住みけるなりけり。

(句解) ○をかしかし、うまいと寝めた詞か、しはよといふ意味と同じ心がある。

(解義) 非常に面白く詠んだ歌だよ、抑この池といふのは、土地の名でも、歴々の身分の人の女が、京都から或男に連れられて、下ツて住んで居るのである、だから其贈物が、このやうに全く風雅である譯だ。

此長櫃のものは、皆人わらはまでにくれたれば、飽き満ちて、船子供は、腹鼓をうちて、海をさへ驚かして、浪をも立てつべし。

(句解) ○わらは、小供のこと。

(解義) そうして、此長持の中に入ツて居る種々の贈物は、皆家來や船子までに、残りなく遣ツたら、皆大に食ツて、船頭どもは嬉がツて腹鼓を叩いて、舟の中を騒がすばかりでなく、海までをも驚かせて、以上に、また浪を立たせるほゞである。かくて此間に事多かる、今日わりを持たせて來たる人、其名などや、今思ひ出せば、此人歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかく云ひ、浪の立つること、發へしひてよめる歌。

ゆくさきに立つ白波の聲よりも

おくれて泣かんわれやまさらむ。

とよめるいと大聲なるべし、持て來たるものよりは、歌はいかゞあらむ

(句解) わりご、辨當。

(解義) かうして居る内に、多くの人々が訪うて來て、いろく世話しかつた。その中、けふ辨當を持たせて來た人は、名は何とか言ツたツけ、能く考へて、今に思ひ出さう。此人は、他の人と違ツて別を惜んで來たといふよりは、歌を詠まうといふ心で、來たのであつたのだ、今合點がいた、何んのかんのと、來た時から喋舌りつゞけて居て、またどうして、かう浪の立つことだらうと、氣の毒さうに嘯やきながら、詠んだ歌は、

君が船路の行先に立つ白波の音よりも、この地に殘ツて居ツて泣いて居る私どもの聲の方が高いだらう。

と詠んだ、ほんとに此歌に言ツてるやうなら、さぞ、非常な大聲であるだらう、ところが、持て來てくれた辨當よりは、此歌は、どうだらう、餘程まづくはないか、しかし平生は、餘り詠まぬ人の歌だから、舟中の人々が、面白いと挨拶ばかりは言ッ

たが一人として返歌をするものはない。
しつべき人も交れど、是をのみいたがり、物をのみ食ひて夜更けぬ。此うたぬし又
まからずといひて立ちぬ。

(句解) いたがり、ほめそやす、○まからず、来ましやう、といふこと。

(解義) 返歌をよみそな人も居ったけれど、唯よい／＼と褒めて、辨當を食ふばかり、どう／＼夜が深けた。かうなれば此人も手持無沙汰になつて来て、不興さうに又参りましやうと言つて、起ち歸つた。

或人の子の童なる、ひそかにいふ、まる此歌のかへしせむといふ、驚きて、いとをかしきことかな、咏みてんや、咏みつくば、早く言へかしといふ。

(句解) まろ、私といふと同じ。○或人、貫之をさしたるなり。

(解義) 或人の子で、まだ極幼なき人が、ソツと小聲で私に、此歌の返歌をしましやうと申します。まだ幼ないものが、皆驚いて、非常に喜んで、それは面白い事だ、しかしお前がほんとに咏むことが出来やうかい、それとも、若し、咏んだなら、早く言つて聞かせて呉れいといふ。

まからずとて、起ちぬる人を待ちて、よまむとて、もとめけるを、夜更けぬとにや、やがていにけりとも、如何よみたるぞ、いぶかしがりて問ふ、この童さすがに耻ぢて言はず、強て問へは言へる歌。

ゆく人もとまるも袖の涙川

みきはのみこそぬれまさりけれ。

とあんよめる、かくはいふものか、うつくしければにや、あらむいと思はずあり、わらは、ことにては何かはせむ、こはおんなおきあにをしつべし、あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらんとて、おかれぬめり。

(解義) 小供のいふには、又参りましやうというて、立ッていた人を待つて、其人の目の前でよましやうといふから、其人をたづねまはして見たが、夜が更けたと思ふてのことか、供舟にも何處にも早や居なかつた、サテそれでは何んと咏んだが、言ッて見よと、不思議そうに尋ねた、ところが、其小供は、さうはいふもの、耻しがッて言はない、是非と言つたれば、

行く人も留まる人も、別れの悲しいのは、同じことである、唯袖を流るゝ涙が、川

のやうになつて居て、其渚の袖が益々ヒシヨクに濡れて行くのが何とも仕
様のないことである。

とよんだ。年に似やはすようかう咏んだとだ、大變かわゆく思ふからの事でもあ
らうが、非常に案外によんだ。かほどの歌を小供の歌としては、反て何の甲斐もな
い、むしろ是は其母や父の歌とするが宜さうな。ともかくも、此歌が悪くても、ど
うあつてもよい、何とか便が有つたら、かの歌を咏んだ人に、遣りたいものだと
うて書きつけて置いた様子である。

八日さほる事ありて、猶同じ所なり。こよひの月は海にぞ入る。これを見て、業平の君
の山の端にげて、入れずもあらなむ、といふ歌なんおぼゆる。

(解義) ○さほる事。春の丁巳、己丑の日には、船に乗らぬものだと、昔は言つたもの
と見えて、丁度此八日が丑の日だから、いけないとて忌んだのである。○業平の君
云々。これは、伊勢物語といふ書にある故事である。其歌は、
あかなくにまたきも月のかくるゝか
山のはにげて入れずもあらなむ。

といふので、其意味は、月も山にかくれ、人も飯らうとするが、まだ話も仕たい、まだ
ゆっくりとして居たいのに、月は全く隠れやうとするのである。か情をい、どうか
山でもどいて仕まつて、あの月を隠れさせまいやうにしたいものである。といふ
の意味の歌。

(通解) 八日は、日が悪いといつて障があるもので、やはり、大湊に居るのである。月は
今までは、山にばかり入るのを見て居たのに、此處に来て、初めて海に入るのを見
た。この月が、だん／＼と隠るゝのを見ても、かの在原業平の歌の、山がにげて、月を
入れぬやうにしてほしい、といふ有名の歌が、面影に立つやうである。

もし、海邊にて詠まゝしかば、浪立ちさへて入れずもあらなむ、とも咏みましや。
(句解) まし、未來を思ふ意にて、詠んだら、といふのと同じ。○立ちさへて、立ち遮る
といふこと

(通解) 若し業平が、その時海邊で咏んだのなら、下の句を、浪が立ちさへて、月を
入れぬやうにしたい事だとか、咏まるゝであらうか。
今此歌を思ひ出で、或人のよめりける。

照る月の流るゝ見れば天の河

出づるみなどは海にざりける。

とや。

(句解)

海にざりける。海にぞありける。といふのを略して言つたのである。

(通解)

いままた此業平の歌を思ひだして、別にそのやうな歌の心にもちりて、或

人暗に作者の貫之自分の事であるが詠んだのは、
照る月が、西の方の海に流るゝやうに入らるさまを見れば、殆んど天と海とは、一

つやうに見える、それはあの天にある天の川の流れ出づる港は、即ちこの見ゆ

るか言つて或人が詠まれました。

九日、つとめて、大湊より那波の泊を追はむとて、漕ぎ出でたり、これかれの互に、國の

境のうちにはとて見送りに來る人、あまたが中に、藤原の言實、橋の季衡、長谷部の行政

等、なん、御館より出でたまひし日より、此處彼處に追ひ來る、此人々ぞ、志ある人なり

ける、この人の深き志は、此海にも劣らざるべし。

(句解)

つとめて、早朝のこと。○那波は土佐國安藝郡奈半利村のこと。○これかれ

その見送り來る人々のこと。○御館は土佐守の役所のこと。即ち今の縣廳と同じこと

(通解) 九日、朝早く大湊から、那波の港に向つて、追風に追はせやうとて、舟を漕ぎ

出した、あれこれの人々が、互にこの土佐境までの間は送らうとて、見送りに來

る人が、澤山ある内に、藤原言實、橋秀衡、長谷部行政などは、縣廳から門立した日よ

りこゝかしこへ跡を追ひ慕ひて來てくれた此人々は、殊に志深く情ある人達で

ある。實に此人達の深い志は、此海の深さに、劣らぬやうに思はれる。

これより、今は漕ぎ放れてゆく。これを見送らむとて、この人共は、追ひ來ける。かく

て漕ぎゆくまに、海はほとりに留まる人も、遠くなりぬ。船の人も見えずなりぬ

岸にもいふことあるべし。舟にも思ふことあれど、かひなし。

(句解) まに、まに、といふこと。

(通解) これから土佐の國を漕ぎはなれて行くのである。かの人どもはこゝまで

此國境まで見送らうとて、追ひ慕ふて來たのであるが、さて、だん／＼と、我舟を漕ぐ

につれて、海際の邊で立ちどまりて、見て居る人も、おひ／＼と、遠くなり、また、かな

たよりは、此船の中の人も見えぬやうになつた岸にも定めて、まだ言ひたいことがあるだらうし、また、こなたの舟にも、思ひ残すことが、まだあるけれど、今は仕方がない。

かゝれど、此歌を獨言にしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れども

ふみしなければ知らずやあるらむ。

〔通解〕 今は仕方もなく、仕様もないから、この歌を、唯船中で獨言を言てこらへて居た。

舟の中からあの陸の方へ通はす心は幾度も海を渡りて行くけれど、しやうがない、文でないから、踏で行くことが出来ないから、向ふの方は、何とも知らずに居るであらう。

かくて宇多の松原を往き過ぐ、其松の數いくそばく、幾千年経たりと知らず、本毎に浪打ちよせ、技ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに堪へずして、船人のよめる歌。

見わたせば、松のうれごと、に接む鶴は

千代のごちとぞ思ふべらなる。

とや。

〔句解〕 いくそばく、ドレホド ○本毎に、松の根毎 ○とひかふ、飛びまはり、ゆきちがふ。○松のうれ、末のこと、うらのこと、梢といふことは、後世の語上古はこぬれと言たのであるが、このこぬれといふのは、即ちこのうれとの語の變化したものである。是は餘言であるが、一寸序だから言ておく。○千代のごち、千年の齡を取る日出たい同志友達であるといふことで、ごちは今のごうしとか、友達のだちと同じ語である。○思ふべらなる、思ふべきなりといふ意、即ち思ひさうな様子であると言てよろし。

〔通解〕 もう一言いひたい、もう一度顔が見たいと、別れを惜んでる内にもはや香美郡にさしかゝりて、宇多の松原を往き過ぐるのであるが、松が澤山で、どれほどあるか分らないほどあつて、またその松は、非常に古くて、何千年のものかも分らない、而して、其松の根ごとには、白浪がドウくと打ちかけ、其上には、群鶴が、枝

六十八
から枝に飛び移て遊で居る景色面白くて何んとも言ふことが出来ないほそである。また船頭さんが詠んだ。(船頭と言ふけれど、實は貫之自身のことであるが唯洒落たのである。)

打ちつゝく松原を見渡して見れば枝の上にはほそこでも、こゝでも、馴れて睦まじさうに棲んで居る鶴——千年の鶴といはれる鶴——を見れば、その鶴もめでたい常磐の松をば互に千年の齡をのぶる友達同志のやうに、思ひさうな様子である。

とか申しました。

此歌は所を見るに、えまさらず。

(通解) しがし、此歌は、餘り善くもない、この所の景色は、とても寫し得ない、風景にはとても及び得ない。(これは自分の歌だから、謙下ツたのである)

かくあるを見つゝ、漕ぎゆくまに——山も海も皆暮れ、夜ふけて、西京も見えずして天氣のこと、櫂取の心に委せつ、男子も習らはねば、いとも心細し。まして女は船底に頭をつきあて、音をのみぞ泣く。

(句解) まに——は前に解いた。〇てけ 天氣のこと。〇ねをのみぞなく、聲を立て泣くばかり、といふの意である。
(通解) かやうに宜い景色を見ながら漕ぎゆくに從て、いつしか山も海も残らず見えないやうに、暮れてしまつたのも凄しいのに、殊にまた夕月も入りてしまつて、東西も分らない深夜の海上に、唯船頭を命に、翌の天氣も何も、その心委せにせねばならない心細さ。男でさい、このやうな船路に出逢たことのない人は、心細いのに別して、女は、舟の底に、あたまをつきあて、打ち伏して、あゝ恐ろしいと聲を上げて泣くばかりである。

かく思へば、舟子、櫂取は、船歌うたひて何とも思へらず。そのうたふ歌は、春の野にてぞ、音をば鳴く、若薄にて手をきる——摘たる菜を親やまほらむ姑や食ふらむ、かへらや、よんべのうなるもがな、錢乞はむ、虚言をして、おぎのりわざをして、錢も持て來ず、たのれだに來ず。

(句解) かへらや、唯歌の拍子に添へた調子で、別に釋はない、今のヤンレナ、ホイといふやうなものである。〇まほらむ、食るといふ意味。一説には、まゐほらむ、といふの

で、好み食ふこと、嗜たしなむの字に充あてるを、と云つて居て、上品じやうひんなやうに、解釋するけれど、元來、昔でも今でも、俗歌といふものは、随分亂暴なものがあつて、道學先生の目から見れば、眉をしかめるものも有るけれど、之れ反て人情の自然の露つゆはれたもので、面白いのである。見處みやうところがあるのである。そこで、余は、こゝに食るといふ釋をつけたのである。○おぎのりわわざ、俗にいふ掛賣かひりりのこと。餘の字を用ひて書く。

〔通解〕 このやうに、苦しい思ふて居るのに、舟子や楫取ともは、何とも思はないで、荒る、夜風に聲はりあげて歌ふのである。そのうたを聞けば、

春の野邊のに出て、嘆なげいて居る、その嘆なげいて居るのを聞けば、若薄わがやうで、このやうに手を傷いためながら、難義なんぎして、子供に遣やらうと摘つまんだ若菜わがやうを、舅ぢやうや姑ぢやうが食くてしまふだらう、悪いことである。しかし、それはどうでもよいが、昨晚の子供が來ればよいが、この錢を取りかへしてやらう、今直ただだと言いて置きながら、知らぬ顔かほをして、けふも持もて來ない、失敬しやくけいな、あの錢ぜにをくれねば、買かひに來きたつて、斷つて遣やらしないのに、當人あたひさへ來きりやあい。

これならず多かれど書かず、これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれど、心はすこし

あきぬ

〔句解〕 すこしなきぬ、少々すこ々し慰なぐさめて、心中こころが快たくなつた。

〔通解〕 こればかりでなく、外ほかに澤山たくさん歌うたもうたつたけれど、皆聞みなき流ながして書かきとめないが、今まで聞き馴なれぬものであるから、可笑可笑しくつて、打ち笑うふ、女子供こどもの聲こゑを聞いて、海うみの波なみは、腹はらを立て、立ちさわぐけれども、畏おそる、心こころは、聊いさか和ないだ。かく往いきくらしして、泊とまりにいたりて、老人おきなひとり、老女おんなひとり、あるが中に、こゝちこゝち悪わるしみして、ものものし給たまはで、ひそまりぬ。

〔句解〕 たきなひと、貫之つらゆきのこと、たうめ、年老ねんじやういたる女おんなのこと、後のところを見れば、このたうめは、淡路あはぢの島しまのたはい子こである。○あしあしあみあしてあ、悪わるしくして、といふこと、氣分きぶんをわるくしてといふこと。

〔通解〕 かやうに、終日しゆうじつ、けふは漕こき暮くらして、那波なばの港みなとに泊とまりて居るのであるが、そのうちに、年寄ねんぢの人ひとと、女おんなとが、船醉ふねよめをして、氣分きぶんが悪わるいと言いて、食くふものもおたべなさらずに、御息ごすゝめになつた。

十日じふにち、けふは、このなほの泊とまりに泊とまりりぬ

(通解) 今日は、風も吹かず、天気も宜いけれど、昨日、大變船に酔ったので、まだ心持が皆悪いから、今日一日休まうと言つて、那半の港に碇泊することにした。

十一日、あかつきより船を出して、室津を追ふ。人皆まだ寝たれば、海のありさまも見えず、たい月を見てぞ、西東を分知りける。かゝる間に、皆夜あけて、手洗ひ例のことどもして、遊になりぬ。今し羽根といふ所に來ぬ。若き童は、此所の名を聞きて、羽根といふ所は、鳥の羽根のやうにやあるといふ、まだ幼き童の事なれば、人々笑ふに、在りける女童なん此歌をよめる。

(句解) 例の事どもして、誰でも朝起くれば、必ず顔洗ひ、着物を着換え、部屋などを掃除するものであるが、此處では、唯手洗ふといふこと計を書いて、餘の事は、例の事と言つて、略したのである。○今し、今と同じ。

(通解) 十一日、もう今日となれば、皆心持も直り、元氣も附いたが、實は已に昨日より船を出さねばならなかつたのだから、まだ曉深く、早過ぎるけれど、船を出して、安藝郡の室津を的に漕ぎ行くのであるが、召し遣ひの者共も皆残らず寝て居て、船の屋形の戸も、蔽けてある筈などは、開けないから海上の有様も見えない、唯

とぞ言へる。

(句解) まことにて、ほんとに。

(通解) 貴方の言ふやうに、此所の名がほんとに、ほんとの鳥の羽根で有つたならどうか、其羽根で以て飛んで行くやうに、疾く、都へ行き着きたいと詠んだ。男も女も、いかでとく都へもがなと思ふ心あれば、此の歌善しとはあらねを實に

と思ひて、人々忘れず、此羽根といふ所問ふ童の序に於、又昔の人を思ひ出で、いづれの時にか忘るゝ、けふは、まして母の悲むことは、下りし時の人の數足りねば、ふるき歌に、數は足らでぞ飯るべらなる、といふことを思ひ出で、人の詠める、

世の中に思ひはあれど子を思ふ

思ひにまざる思ひなきかな

といひつゝなん

(通解) 船中の男も女も皆、せうぞ早く都へ飯りたい、飯りたいとばかり、心に思うて居るものだから、餘り宜い歌といふではないけれど、丁度誰も同じやうに思うて居る時であつたので、成程と感じて、人々はいつまでも、折々此歌を言ひ出して忘れないのである。さて、此羽根といふ名について歌を詠んだ子供の事は、依つて又昔の人となつた死んだ我娘の事を思ひ出して、ああ、このやうに、無事で皆飯つて來るのに、遠い處に一人が残つて飯られないやうになつた事は、せうして一生涯忘れられ、せうぞ、とても忘れはせられない、けふは、別して母の悲むことは甚しい、六年以前に、下つた時は、あの子も居つたのだが、今度は、人數が一人減つて居るから

かの古今集にある、數は足らでぞ飯るべらなるといふ、古歌を思ひ出して、或る人が詠んだ、(しかし尙貫之の詠んだのである)

世の中には、種々様々の物思ひの數は、澤山だけれど、其中にも子を慕ふ親の思ひに勝るほど、切を思ひは無いものだよ。

と言つて歎きました。

(句解) 數は足らでぞ飯るべうなる。古今集の旅の部にあるところの、作者の知れない歌であつて、かういふ歌である。

北へゆく雁ぞ鳴くなる連れて來し

數は足らでぞ飯るべうある。

此歌は、或男が女と一緒に、他國へ旅して居たが、其内連れ合ひの男が死んだので、女が都へ飯らうとした途中に、鳴いて行く雁の聲を聞いて、詠んだ歌である。而して歌の意味は、北の方へ鳴いて飯つて行く雁の聲が聞えるが、來る時一緒に來たほどの數ではない、少くなつて居るのであるが、其れでも飯らねばならぬから、今飯つて行くのであらう、妾も其通りである、といふ歌である。へらある、といふは、古

今集時代即ち平安朝となつて出来た語で、^ベきなり、といふと同じのである。○けふはまして、貫之が土佐に居る時に死んだ娘は、丁度六年以前、即ち延長八年十一月の今日、十一日に伴ひて下つたのである。

十二日、雨降らず。文時、維茂が船の後れたりし、奈良志津より室津につきぬ。

(句解) 文時は、貫之の子、時文の事なりと言ふ人もあるが、そうであつて、他人で、厨官の人だらう。○後れたりし、後れたりきと言はないで、しなど、下に續かねばならぬ動詞を用ゐたのは、舟といふ字を略したので、かやうな例は始終あるから、氣を注げ置くがよい。

(通解) 十二日、朝より降りさうであつたが、どうも降らなかつた。厨官の文時、維茂が船は、昨日の港から、今朝出帆の時に後れて居たが、奈良志津から、今居る室津に漕ぎ寄せて来た。

十三日、曉にいさゝか降る、しばしありて止みぬ。男女これかれ沐浴せんとて、あたりのよろしき所に、下りて行く。海を見やれば、

雲もみな浪とぞ見ゆる。海士もがな

いづれか海と問ひて知るべく。

となん歌よめる。

(句解) 湯あみせん、陸に上り人家などにゆきて、湯に入るといふではない、明十四日は、齋日だから、皆舟から下りて磯邊の岩陰などで、沙あびをするといふ事なり。○あたりのよろしき所、恰好のよい所あたり、近所の工合のよいところ。

(通解) 十三日の夜の引き明け頃になつて少々雨が降つたけれど、一時して降り止んだ。空も晴れて来たし、翌は齋日だから、男も女も大勢誰も彼も、一つ沙でも浴びやうと言つて、工合のよい場所を見定めて、船から下りて、さぶく磯邊の方に行くのであるが、貫之自身は、早うから少し病氣があるので、沙あひも見合せて、獨船の中に残つて居る。今までは、大勢で實に騒がしかつたが、皆下りたので、静かにゆるりとなつて、心ものびくするやうである。海上遙かに見渡せば、雨あがりの空は、また特別である、そこで、

見渡せば、廣い青空の中に、まだ處々には、ちぎれくの白雲が見ゆるが、ほんとに浪と同じやうで、どちらがどちらとも、見分けが附かない、かういふ時に

は平生海で育て居る漁夫でも来ればよい、どちらが海で、どちらが雲であるかと尋ねて見定めを附たいほどである。
といふ歌を詠んだ。

さて十日あまりなれば、月面白し、船に乗り初めし日より、船には紅濃く、よき衣着す。それは海の神に恐ぢてといひて、何のあしかげにことつけて、はやのつまのいすし。船あはびとごふにもあらぬ脛にあけつて見せける。

(句解) 十日あまりは十三日の日であるから即ち十日に三日だけあまりの日である。○月たもしろしは既に満月であるとするれば其景えも言はれぬ程に面白い。○紅濃くよき衣着すは紅の濃き色の美服を身に着けまとはすとのこと。○恐ぢては海神は物めでするよしなれば其海神が見入れて崇りをしてはならんと畏れること。

(通解) けふは十三日であるから稍や満月に近いかから月の景色が面白い船に初めて乗りた日からいつともわざとそまつなきものばかり着てすこしもよき衣服を着たことはない何故なれば海の神様は美服を着たものは見とれせられる。

そうだからもしやのことがありてはならぬと恐れて着ないのであるとの意にてこれは紀氏の例の諧けである其實何事も道中は不自由にてあたりまへの衣服も着ることが出来ぬと言ふことを言ふたのである。
何いあしかげにことつけてより見せけるまでの句は先哲の契沖、眞淵氏及び其他の有名なる人々も之れを解釋せられずそは教育上少し、いまわしき事からであるからである故に余も本講義に於て遺憾ながら此句を解かぬから讀者は此句の意は
男女とも湯浴して圖らすも陰部をあらはしたといふことを、打興して書いたのであると知れば足りぬことである。
十四日 あかつきより雨ふれば同じ所にとまれり、ふな君せちみす、さうじ物なれば、うまのときよりのちに、かちどりのきのふつりたりしたひに、せになければ、よねをとりかけて、おちられぬ、かゝることおほくありぬ、かじどり又た、たひもてきたりよね、さげ、なごくるかちどりけしきあしからず。

(句解) さうじ物は精進物の意。○せちみすは節忌のことにて即ち十四日は六齋

日に當りて精進すべき日である。おちられぬは精進おちをせられたること

(通解) 夜明の頃より雨が降りたから同じ所ろにて一夜泊まりた其日は折角十
四日にて六齊日にあたるから船主即ち紀氏は節忌せられて凡て肉食をやめ精
進物を用ひておられたが午の刻より後はもはや十五日の都てあるから船子共
が昨日つりた鯛を持ちて来たけれど船中にて錢がないから米と取かへて精進
落ちをせられたこのようなことがたび／＼ありました船子等は又／＼鯛を持ち
て来たから又米や酒などを遣りたが船子等もうれしそうな顔をしておりた
十五日 けふあづきがゆにすくちをししなほ日のあしければ、あざるほごにぞけ
ふはつかあまりへぬる、いたづらに日をふれば、人々海をながめつゝぞある、

(句解) あづきがゆにすは正月十五日小豆粥を煮ることは、延喜式及び拾芥抄な
どにも見えてゐるこれは一年中疫病にかゝらぬと古昔よりの傳へである○あ
ざるほごにぞは膝行の狀にて即ち天氣が悪しく風波の起りて船が進まぬをい
ふ

(通解) 今日正月の十五日であるのに残念なことには海上にて物事不自由で

であるから小豆粥も煮ることが出来ないその上風が吹き出して波が立ちさは
ぐから船は少しも進まぬやうで、いざりの歩行の如くである。もはや廿日あま
りも過ぎ経て今日まで幾日間も海の上にて難義してゐるにすこしも船が進ま
ずしてむだに月日はかり進むから誰も彼もうらめしそりに海上ばかりながめ
ておる

めのわらはのいへる

たてばたちゐればまたゐる、ふく風となみとはおもふ、さちにやあるらん
いふかひなきものゝいへるにはいとにつかはし

(句解) めのわらはとは女の童といふこと○思ふごちは氣の會ふものといふ事
で、此處では童女を指したのである○いと、は頗る、餘程○につかはしは相應など
いふこと

(通解) そこで女の童の讀みた歌に風か立ては波も立つ風か吹きやめは、また直
くに波も静まるほんとうに可笑し。して見れば、風と波とは氣の會つたお友達であ
るのだからと思はれるにやあるらんはにやはにてやとの疑問詞であるあるら

んはあるならんにて即ちあるであらうと云ふ辭の反語であるこれに常にやの疑問詞あるときに用ゐる推量反語である詳しきことは文典にて説く
十六日、風止まねば、なほ同じところに泊れりたゞ海に波なくして、いつしか御崎といふ所渡らんとのみなん思ふを、風波ともに止むべくもあらき、或人の此波立つを見て、詠める歌。

霜だにも置かぬ方ぞといふなれど
波の中には雪ぞふりける。

さて船に乗りし日より、今日まで、二十日あまり五日になりけり。

(句解) いつしか何時かといふと同じ心、何時か々々と急ぐ意。○御崎、室津より一里で、室戸崎ともいふ處。○二十日あまり五日、十二月二十一日より正月十六日までをいふ。

(通解) 十六日、風が止まないから、やはり同じ所に舟を泊めた、明けても暮れてもひたすら海上平穩に波が静まつて、どうぞ早く御崎といふ所を、無事に渡らうと計り念じて居るのに、風も波も、どちらも止みさうでないところが、或人がまた、此

波が白く立ち騒いで居るのを見て、詠んだのだ。

土佐などは南の方の國であるから、霜でも降らないと言つては居るけれど、霜どころでない、波の中には、雪が降つて居るワイ。

扱て、乗船の日から、今日まで、數へて見れば、二十五日にもなつて居るのだ。

十七日、くもれる雲なくなり、曉月夜いと面白ければ、船を出して、漕ぎ行く。この間に、雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。うへも昔の男の子は、棹は穿つ波の上の月を、船は襲ふ海の中の空を、とは言ひけむ、聞きさしに聞けるなり。

(句解) くもれる雲なくなり、雲つて居た雲がなくなつて。○曉月夜、十七日は、八時頃月が出るから、曉にもまだ空高く月が残つて居る。そのあけがたの月を言ふ。○この間、舟を漕いで行く。あひだ。○うへげに、最といふこと。○昔の、唐の賈島を指したのである。詩人玉屑といふ書に、朝鮮の公使が海を渡る時に、水鳥浮還没、山雲斷復連、といふ詩を作つて得意になつて居る處に、此賈島といふ有名な詩人が賤い人夫の眞似をして居て、其下の句にかう附けた。棹穿波底、月船壓水中、天是を聞いて、朝鮮公使は、吃驚して二度と詩の事を言はなかつた。と書いてある。此詩

は有名であるから、貫之が引いたのである。然るに、賈島のもの詩とは違つて、沈底を波上、水中を海中、塵を襲ふとしある。成程是は賈島の通りにいふのが、實情であるけれども、女子の筆にて書けるやうにせねばならぬから、或はわざとかうしたのでもあらうか、また或はひよつとすれば、思ひ違つたのかも知れない。○棹は穿つ云々、波の上に月がありありと映つて居る處を、棹でざぶ／＼と突き崩してゆき、海の底に、冴え／＼とした青い空が映つて居る處を、どし／＼と船が突き進んで居るといふ意である。○聞きさしに聞く、一寸聞き嚙りに聞く。

(通解) 十七日、曇つて居た雲が無くなつて明けがたの月影が、まことに佳いから船を立て、四方を眺めながら漕いで行く、そのうちに、空は波に映り、波は空を浮かせて、波の上も、海の底も同じやうに見渡される。ほんとは、昔の賈島とか言つた人が、このやうな景色を見て、棹は波の上の月を破り、船は海の中の空を押し破ると言つたのであるだらう。しかし私は、此詩はよく知らぬ、たい人の言つて居る事を、少しばかり聞きつけかけに聞いたのである。

また或人の詠めるは、

水底の月の上より漕ぐ舟の
棹にさはるは桂なるらむ。

これを聞きて、或人のまた詠める
影見れば波の底なる久方の

空漕き渡るわれぞわびしき。

(句解) ○かつら、月の中には桂といふ樹があると昔から言つたものである。○久方、空といふ詞の枕詞、○わびしき、心細き。

(通解) また何とか言ふ人、即ち自分が詠んだのを、洒落てかういふので、前にも度々出て居るが詠んだのに、

水の底に映つて居る月の上を、漕ぐ舟の棹に、障るやうに思はれるのは、月の中に
あるといふ桂の木の枝でもあるだらうか。

かう詠んだので、また或人は

我影を見れば、波の底に映つて居る空の上を漕いで行くので、誠に心細う思はれる。さうでなくても、遠い海の中で十分心細いのに、

かくいふ間に、夜やうやく明けゆくに、揖取等、黒き雲俄に出でさぬ風吹きぬべし、御船返してむと云ひて船返る。此間雨降りぬ、いとわびし。

(句解) 揖取等、船頭共、○風吹きぬべし、必定風が吹き出すだらう。○舟かへる、もとの室津を指して舟の引きかへす。

(通解) こんなことを歌ふ間に、夜もだん／＼明けゆかうとする時、水夫共が言ふには、黒雲が急に出来た、風が吹き出すだらう、行先が心元ないから、速に御船を引き返しませうと云ひて、以前の港へ戻る。その間に、いよ／＼雨が降つて来た、何とも云へない難義である。

十八日、おなじ所にあり、海荒ければ、船出さず、此泊より遠く見れども、近く見れども、いごたもしろし。かゝれども、苦しければ、何事も覺えず。男達は、心遣りにやあらむ唐歌などいふべし。船も出さず、徒なれば或人の詠める。

磯ぶりの寄する磯には、年月を

いつとも分ぬ雪のみぞ降る。

この歌は、つねに爲ぬ人のことあり。

(句解) かゝれども、かくあれどもといふ事であるけれども、いふ意。○心遣り、氣晴し。○から歌、詩のこと。○磯ぶり、磯に當つて碎くる荒波のこと。○つねに、せぬ人、平生は歌など詠まぬ人。

(通解) 十八日、やはり同じ港に居る。海が荒いから船は出さず、此港から、己に二十日以來、遠く見ても、近く見ても、ほんとに面白い。うではあるが、草臥れて苦しむから、佳い景色とも思はれない。女達は皆なやんで物言ふ力もなくなつて居るが、男子は氣晴らしであらう、吟詩などして居るやうだ。船も出さぬいで、手を空しう日を暮して居るから。

荒波が滔々と打ちつける磯邊には、年月の時節に限らず、いつと定めず、いつでも雪ばかり降つて居る。

この歌は平生歌ひもせぬ人の歌であるが、それとしては頗るの出来だ。又或る人の詠める。

風による波の磯には、鶯も

春をえ知らぬ花のみぞ咲く。

この歌どもを、少しよろしと聞きて、船の長しける翁月ころの苦しきに、心やりに詠める。

立つ波を雪か花かど吹く風ぞ

よせつゝ人を欺るべらなり。

〔句解〕 風による波の磯。風に波のよる磯といふべきところを、歌だからこのやうに言つたのである。即ち風の吹く爲に波が打ちよする處の磯邊。〇少しよろしと聞きて、此歌少しは面白い、退屈の心も少しは引き立つた。一寸面白い歌であると御覽せられて、〇心遣り、慰み。〇はかるべらなる。欺しさうな様子である。

〔通解〕 また或る人が讀んだのに、

風の爲に波が碎けて打ち寄するところの磯邊には、鶯も知らねば、また春にも知ることの出来ぬ花が、常に咲いて居る。前の歌は、時節構はず、いふて雪が降つて居ると言つたのを、今度は春も知らねば、鶯も知つて居ない處の花が咲いて居ると言つたのである。だから、前の歌と考は同じ處から出たのである。したれば、是等の歌を、船主のお爺さん即貫之が見て、是は一寸面白い、うれなら、私

も一つ近來の不愉快晴しに詠みませうとて、

ほんどに騒いで居るあの白浪を、雪か花かど見擬はせるやうに、吹くところの風は波をどしどし寄せしめて、人を欺さうとする様子である。さて、面白

し。

この歌どもを、人の何にかといふを、或人聞き耽りてよめる。その歌詠める文字三十字あまり、七文字。人皆えあらずで笑ふやうなり。歌主いと氣色悪しくてえまます。眞似べども、えまねばず、書けりとも、えよみあへ難かるべし。けふだに斯く言ひ難し、まして後には如何ならむ。

〔句解〕 三十字あまり七文字。歌は三十一文字であるべきのに、三十七文字であつたといふこと。〇えあらずで笑ふ、皆堪へきらずに笑ふ。〇歌主、此三十七字の歌を詠んだ人。〇えまねばず、怨ずといふ音のまゝに書いたので、執念深く怨むる事。

〔通解〕 このやうにだん／＼色々の人々が詠んで、それを何のかのと善し悪しを評しあつて居るのを、また或人が傍に其等の詞を聞いて居て、己も一つと少し自慢氣が出て詠んだ。ところがその詠んだ歌は、三十七字もあつたので、皆が吹き出し

て笑つたやうである。詠んだ人は、其さまを見て、頗る顔色を悪うして、怨んだしかし、其顔と言つたら、とても真似をしやうとしても、せられなく筆で書いても、とても読みとる事は出来ないと思はれる。今聞いた今日でさへ、かやうに言ひにくい。のだから、別して後で聞く人には、歌とも何とも分るまい。

十九日、日あしければ、舟出さす。

(通解) 海が荒れて居るから、舟は出さない。

二十日、昨日のやうなれば、舟出さず、皆人々憂へ歎く、苦しぐ心もとなければ、唯日の経ぬる數を、今日幾日、二十日、三十日と數ふれば、指も傷はれぬべし。

(句解) 苦しぐ心もとなければ、まことに苦うて、心が苛々するから。○今日幾日、今日にて幾日だと數へる。○およびゆびといふのが本當なので、およびは當時の俗語である。おといふけれど、小指でも親指でもなく、五本の指の總稱である。

(通解) 二十日、けふも昨日と同じやうに、海が荒れて居るから、舟は出さない。船中の人共は、皆心を痛めて困つて居るまことに、いつ出ることかと、心が急かされて、苛々する。唯日の経つのを、今日で幾日だ、今日で幾日だと言つて、二十日、三十日

と指折り數ふれば、指がたゆんで、節々が傷うはせである。

夜は、いも寝ず、いとわびし。二十日の夜の月出でにけり、山の端もなく、海の中よりぞ出でくる。

(句解) いも寝ず、寝も寝ずといふこと、同じ寝もしないといふこと。○いとわびし、大變思ひ煩ふ。

(通解) 夜は夜通し寝ないで、いろ／＼と思ひ煩つて居る。その内、夜の十時過ぎ頃にもなつたれば、雲も晴れて、二十日の月が出た。土佐の東南は、大洋であるから、月は、此廣々とある海の中から出たのである。普通月は山から出るもの、やうに見て居たが、

かやうなるを見てや、ひかし安倍の仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて歸り來ける時に、舟に乗るべき處にて、かの國の人馬の儀、別惜みて、彼所の唐歌作りなどしける。

(句解) 見てや、此句のやは、下の唐歌作りなどしけるのけるにかゝつて居る。○安倍仲麻呂、中務大輔、船守の子、十六歳の時、遣唐留學生となつて、支那に行つたが、遂

に支那の朝廷に仕へて秘書監兼術府卿に任せられた、そうして名をも朝衡と更へて歸化した。勝實中藤原清河といふ人が、唐に到つて還るとき、仲麻呂も一緒に歸らうとした。此時、その國の文學者王維、包佶、趙驥、またかの有名な李太白といふ人も、送別の詩を作つて贈つたが、難風に遇つて、安南といふ國に流れ着いた。遂に日本に歸ることが出来なくて、また唐に引き還し、肅宗といふ天子に仕へて、左散騎常侍、安南都護といふ位になつた。死んだのは、丁度光仁天皇の元年で、年は七八といふことである。○馬の餞人の別に贈るお餞別。

(通解) 二十日の月が、大海の波の上に、照り渡つて來た、このやうな月を見て、昔かの安倍の仲麻呂は、支那に行つて歸らうとして、港に來た時、かの國の友人達が、餞別として、大變別れを惜んで、支那の歌即ち詩を作つたりなした。

飽すやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。之れを見て、仲麻呂のぬし、我國は斯かる歌なん、神代より神も詠みたび、今は上、中、下の人も、斯様に別れ惜み、喜びもあり、悲みもある時には、詠むとて詠めりける歌。
蒼海原振りさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

とぞ詠めりける。

(句解) 飽かすやありけむ、いつまで経つてもお別れの名残が盡きざつたであらう。○仲麻呂のぬし、仲麻呂氏といふことぬしは、のうしといふ語が約つたのであるから、ぬしと言つては、重複する、いづれ寫し誤りであらう。○斯る歌なん、このやうなる歌をぞといふこと、なんは、ぞと同じ。○詠みたび、たびは給ひといふこと、それを音便に言ひ習つたのである。○蒼海原、古今集にも、百人一首にもあまのはらとある、これでは調子が悪いから、改めたのである。○振りさけみれば、後向いて遠くを見かへれば、○春日なる、奈良の都の春日といふところにあるといふこと。○かも、これは少し疑の意味がある、いつも三笠の山に出る月であるだらうか、どうであらうかといふ意がある。

(通解) いつまで経つても、別れの悲しさが盡きなかつただらう、遅く出る二十の月の登るまで、人々は散らなかつた、その時その月は、港の外の方から上つたのである。仲麻呂は、此月影を眺めて、私の國は、このやうな歌といふものを、神様の

時代から神様も御詠なさって、今は上等社會の人も、中等の人も、下等社會の人も、このやうなお別れの時や、喜び悲みのあつた時には、皆詠んで居ますと言つて詠んだ歌は、

青々とした海上を遙かに振りむいて見れば、月が大空に高く照つて居る、あ、此月も我故郷日本の國の奈良の都の春日にある三笠山に、ひかし出て居た月であらう。

と詠んだ。

かの國の人聞き知るまじと覺えたれど、言の意を男文字にさまを書き出して、此處の詞傳へたる人に、いひ知らせければ、意をや聞き得たりけむいと思ひの外になん愛でける。唐土と此の國とは詞異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

(句解) 聞き知りまじく、日本語だから唐人には解し得られまじくといふこと。○この心の詞の意味。○男文字、漢文にてといふこと。○さまを書き出す、和歌の意味の有様を書き直す。○この詞傳へたる人に、通譯する人といふこと。

(通解) 唐土の人は、此歌をば知るまいと思ひたれど、歌の譯を漢文に書いて、其の出来る人に見せて話して貰つたれば、意味が分つたのであらう。大變存外善いと褒めた。唐土と我國とは言語が違つては居るけれど、天上の月影は何處も同じことであらうから、人の心もまた同じことであらう。

さて今、そのかみを思ひやりて、或人のよめる歌。

都にて山の端に見し月なれど

波より出で、波にこそ入れ。

(句解) そのかみ、そのむかし、○山の端に見し、山の端

(通解) 仲麿の歌に支那の人も感心したといふが、さて今、その當時のことを思ひやつて、或人がまた詠んだ歌は、

むかし都では、山から出て、山にばかり入つた月を見たのであるが、今は波から出て、波にこそ入る月を見るのである。

廿一日、卯の時ばかりに船出す。皆人々の船出づ、これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。

(句解) 卯の時は、今の午前六時、はかりは頃、○人々の船家來等の船
 ○春の海に秋の木葉しも、春の海と言つて少し陽氣に言つたのは、久しぶりに、天
 氣となつて嬉し勇ましく思つたからであらう。秋の葉と言つたのは、海に船の浮
 ぶのを、木の葉が浮ぶやうだと言ひ習つてあるからである。しもはのどかかとか
 いふのと同じ。

(通解) 午前六時頃、船が出た、風官等の船も出た、是を見れば、恰も廣々たる春の海
 に秋の落葉が散るやうであつた。

たぼろげの願によりてはやあらむ、風も吹かず、よき日出で来て漕ぎ行く。この間に
 使はれんとて、附きて來る童あり、それが歌ふ歌。

なほこそ國のかたは見やらるれ、わが父母ありとし思へば、かへらや。
 と歌ふぞ憫なる。

(句解) おぼろげの願勝れたることもなき拙い豫ての願、即ち天氣になつて呉れ
 よと、心に祈つて居たこと。○風も吹かず、もといふ文字があるから、勿論、雨も波
 もないことが分る。○此間に、天氣もよく、舟が進む間にといふ意味であつて、下の

句の歌ふ歌といふに續くのである。使はれんとて附きて來る童ありといふ句は
 唯中に挿んだものである。○使はれむと、召し使つて貰いたいと言つてといふこ
 と。○なほこそ國の方は見やらるれ、思ひ切つて國は出たが、矢張故郷の空は、なつ
 かしく、心残りがして、後向いて見る。○父母ありとし思へば、しは意味なし、なくても
 よいのである。○かへらや、飯りたい。

(通解) 天氣になつて呉れよと、拙い心ながらも祈つて居たが、其願でもあらうか
 風もなく、非常に宜い日とあつて、船を出した、船が進行する内に、先達から使つ
 て呉れと頼まれて居た小兒が居て、船歌を歌つた。

思ひ切つて、海路を遠く、漕いで出たが、故郷の方は後向きがらだ、なつかしい
 父母が居ると思へば、ああ飯りたいナア。
 と歌つて居る、可愛想である。

かく歌ふを聞きつゝ、漕ぎ來るに、黒鳥といふ鳥巖の上に集まり居り、其巖の下に、波
 白く打ち寄す、擗取の言ふやう、黒き鳥の下に、白き波を寄すとぞいふ。この詞何とに
 はなけれど、物言ふやうにぞ聞えたる、人のほどに合はねば、咎むるなり。

(句解) 何○ど○に○は○な○け○れ○ど○何○ん○で○も○あ○い○こ○と○な○れ○ど○即○ち○わ○ざ○く○歌○は○う○と○い○ふ
考○で○言○つ○た○の○は○な○い○け○れ○ど○物○言○ふ○や○う○物○の○あ○り○け○に○即○ち○心○の○あ○り○げ○に○言
ふ○や○う○で○あ○る○人○の○ほ○ど○に○合○は○ね○ば○揖○取○の○今○際○に○も○似○合○は○ぬ○面○白○い○詞○答○む
る○な○り○一○寸○面○白○い○言○ひ○や○う○で○あ○る○か○ら○聞○き○耳○を○立○て○注○意○し○た○の○で○あ○る○

(通解) 船子が歌ふ歌を聞きながら、船を進ませて行く内に、黒鳥といふ鳥が、岩の
上に集つて居るが、其下に白波が打ち寄せて居るのを、揖取が、やれ黒鳥の下に白
波が寄せて居ると言つて居る。わざと考へて言つた詞ではないのであるが、何
んたる、面白い詞である、黒い鳥に白波、歌のやうに洒落れて居るやうである。揖取
如き無學なものには、不似合の詞であるから、耳立ちたのである。

斯く言ひつゝ、行くに、舟君なる人、波を見て、園より始めて海賊報いせむといふなる
ことを思ふが上に、海の又恐しければ、頭も皆白けぬ。七十八は、海にあるものなり
けり。

わが髪かみの雪ゆきと磯邊いそべの白波しろなみと

孰たゞれ勝まされり沖おきつ島守しまもり。

と揖取いへり。

(句解) 舟君、貫之のこと。○波○を○見○て○盗賊の○こ○と○を○む○か○し○か○ら○白○波○と○も○言○つ○て○居
る○か○ら○今○此○白○い○波○を○見○て○盗賊の○事○を○心○に○思○へ○た○の○で○あ○る○即○ち○聯○想○し○た○の○で○あ
る○。○國○よ○り○始○め○て○土○佐○に○居○た○時○即○ち○始○め○か○ら○聞○い○て○居○た○と○い○ふ○こ○と○。○海○賊○報
い○せ○む○こ○の○頃○内○海○及○び○南○海○に○は○海○賊○が○居○て○處○々○を○荒○ら○し○た○も○の○で○あ○る○報○い○せ
む○と○い○ふ○は○貫○之○が○土○佐○守○で○居○る○時○こ○の○海○賊○を○征○伐○し○や○う○と○し○た○事○が○あ○る○の○で
そ○れ○を○海○賊○共○が○怨○ん○で○報○い○や○う○と○す○る○の○で○あ○る○。○七○十○八○十○は○云○々○當○時○貫○之○は○五
十○歳○あ○ま○り○で○あ○る○の○に○船○に○乗○つ○て○か○ら○色○々○と○心○配○ば○か○り○を○し○て○今○ま○だ○白○波○を○見
て○急○に○年○を○取○つ○て○白○髪○と○な○つ○た○や○う○だ○か○ら○ほ○ん○と○に○七○十○八○十○の○や○う○に○年○を○取
る○の○は○海○の○た○め○で○あ○る○し○て○見○れ○ば○老○と○い○ふ○も○の○は○海○に○あ○る○も○の○で○あ○る○。○孰○れ
勝○れ○り○髪○の○白○さ○と○波○の○白○さ○は○ど○ち○ら○が○白○い○か○と○い○ふ○意○沖○つ○島○守○島○守○よ○り○問○ひ
か○け○た○の○で○あ○る○沖○つ○島○守○と○は○沖○の○島○に○住○ん○で○居○る○人○と○い○ふ○た○け○の○こ○と○で○あ○る
(通解) かやうに、色々なことを言つて來るうちに、船君たる人は、白波の立つのを見
て始めから即ち園に居る時分から聞いて居た、白波、盗賊といふことが返報を

するといふ話を思ひ出し、またその上海がまた荒れねばよいがと、恐ろしいから、
頭の髪がその爲め眞白になつてしまつた。七十の、八十のといふ年は、海にあそも
の見える、即ち年が一度にふけてくるやうになるのは、海である。

私の髪が、白くて雪のやうなものと、あの立つて居る白波とは、どちらが白いか、判
じて見よ、沖に居る島人よ。

と母取が詠んだ。

廿二日、時夜の泊より、他泊を追ひて行く。遙に山見ゆ。年九つばかりなる男の童年よ
りは、幼くぞある。この童舟を漕ぐまに、山も行くと思ゆるを見て、怪しき歌をぞ
詠める。そのうた。

漕ぎて行く舟にて見れば、足引の

山さへ行くを松は知らずや。

幼き童の言にては、似つかはし。今日海荒らげ磯に雪降り、浪の花咲けり。成人の詠め
る。

浪とのみ偏に聞けど色見れば

雪と花とに紛ひけるかな。

(句解) 他泊、昨夜の港から、先の港へゆくといふ事。○舟を漕ぐまに、舟を漕ぐ
につれてといふこと。○怪しき歌、變な歌。○足引の山、といふ詞の枕詞である。枕詞
といふことは、下にある或る詞の形容のやうな意味のものである。即ちこゝでは
裾を長く引きのばしたやうな山といふのである。○似つかはし、似合つて居る。相
應して居る。○荒らげ、波が荒げる。

(通解) よんべの港から、つぎの港をさして行くうちに、遙か向ふに山が見える。此
山を見て、九つばかりになつて居る男の兒が、また年よりは餘程小兒に見えるの
が、舟が進むにつれて舟が動かなくて、山が行くやうに見えるのを見て、變なかう
いふ歌を詠んだ。その歌は、

漕いで行く舟から見れば、動かぬことは、山のやうなど、動かぬ例にもあつて
居る。山さへゆくゝ動いて居るのをその下に生えて居る松の木は、何とも
知らないのであるか。

と詠んだ。幼き小兒の歌としては、尤な似合つたやうな、まづい歌である。ところが

けふは海が荒れて、磯ばたは雪の降るやうに、また花の咲いて居るやうに真白くなつて居たから、或人が詠んだ。

海に白く散つて居るものは、唯浪とばかりに思つて居たのに、よく色を見れば、そうではなくて、全く冬降る雪と、春咲く花に紛うやうである。

廿三日、日照りて曇りぬ此の邊海賊恐れありといへば、神佛を祈る。

〔句解〕 海賊恐れありといへば、人家も泊つて居る船も少ないから、海賊が人を劫かす恐れあると、従者か舟子等がいつたのである。

〔通解〕 照つて居た空が曇つて來た、此の邊は寂い處であつて、海賊が押しかけて來るといふことであるから、神や佛に、どうかそんなことが無いやうにと、安全を祈る。

廿四日、昨日の同じ處なり。

〔通解〕 きのふと同じ天氣であると見えて、矢張り同じ所に碇泊するのである。

廿五日、揖取等の北風悪しといへば、舟出さず、海賊追ひ來といふこと、絶えず聞ゆ。

〔通解〕 海が凧いだやうであるから、舟を出してはどうかと尋ねたところが、船頭共がまだ北風が悪う御座いますといふから、出さない。此のやうに幾日も滞泊して舟を出すことも出来ないところに、絶えず海賊が押し寄るといふ風聞が聞ゆる、まことに心寒いことである。

廿六日、まことにやあらむ、海賊追ふといへば、夜半ばかりより船を出して漕ぎ來る揖取して幣奉らするに、幣の東へ散れば、揖取の申して奉る言は、この幣の散るかたに、御船速に漕がしめ給へと申して奉る。これを聞きて、或童の詠める。

海の道觸の神に手向する

幣の追風止まず吹かなむ

とぞ詠める。

〔句解〕 眞にやあらむ、本當であらうか。○夜半ばかり、夜中頃。○手向けする處あり、手向とは、旅行をしやうとする時、道中の無事を祈るために、神に幣を奉ること。○處ありといふは、全体手向は、陸上の旅にて、境の山を越ゆる時、其山にて神に祈をするものである。船旅でも、後には必ず手向をするやうになつたのであるから、今

此處でも丁度首途をする船があつたと見えて、幣を神様に捧げて居る即ちわが船を出して漕いで来るうちに、向ふに手向をして居るところの船がある。○幣神に祈事をする時、用ゐるもので、麻木綿帛などで織つたものも、織らぬいまゝのものをも用ゐるし、また紙を代りにも用ゐる。あの招魂社のお祭りなどで、神官が櫛の枝に白紙を切つたものをつけて、神様の前に上るのは、これである。○揖取して、揖取を以てとか、揖取にさせてといふ意味。○揖取の申して奉る言は、揖取が神に祈る詞はといふ意。○或重これも貫之自分のこと。○わだつみもとは海の神様の名であつたが、のちには、海のことゝなつたのである。○逆觸の神、此神は隱岐の國知夫里郡知夫里崎にあるわだつみの宮といふ神様の事で、船出の時には、幣を上げて、海上安全といふのであるが、のちには、海陸共に道中の安全を祈る神をばちぶりの神と名づけたといふことである。

〔通解〕 海賊が来るといふのは、本當でもあるのか、十二時頃になつて、船を出した（其實は風向きが少し善くあつたので）ところが、道で、首途の手向をして居る船を見た、だから船頭に、幣をお前も序であるから、といつて、奉らせたのに、幣が東へ散

つたれば船頭の祈つていふのには、どうか神様、この幣が散る方に、この船を速に漕ぐやうに、お助けをお願い申しますと祈つて居る。これを聞いて、或子供が詠んだ歌は、

海の神様の道觸の神に、さしあげる此幣を、吹き散らす風の方向の通り、吹いたなら船には追風であるから、止まず吹かして下さい、さうすれば、早く都に飯られます。

といふ歌である。

此程に、風の好ければ、揖取いたく誇りて、舟に帆かけよなぞ喜ぶ、その音を聞きて、わらはも女も、いつしかさし思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。この中に、淡路の老婦といふ人の詠める歌。

追風の吹きぬる時は行く船の

帆手打ちてこそ嬉しかりけれ

と云、天氣のことにつけつゝ祈る。

〔句解〕 いたく誇りて、非常に自慢して、○いつしかさし思へばにやあらむ、こゝに

しといふ字が二つあれど、ないのと同じにて、唯詞の調子に入れた丈である。いつか遠く立たない内に、都に皈られる見込みがついたと思つたからでもあらう。この中に、船の内の人の中にといふ意味。○淡路のたうめ。淡路生れの老女。貫之が召し使ひの老女。○行く舟の帆手打ちて、進行する船の帆がばたくと音をするのが、人の手を拍つやうに見立てたのである。

(通解) かうする内に、風向が好いものだから、船頭は、大層自慢の体で、こゝろ見よ、おれの御願が利いたのだ、早く帆をかけて出立せよなど、言つて喜んで居る。船の内に淡路の老婦といふ人があつて、この人が歌を詠んだ。

追手の風が吹いた時は、皆一同が、船が駛る時に、帆がばたくと拍手喝采をする音のやうに手を拍いて嬉しうあります。

と、天氣のことにつけて、また神に祈りの心に、歌を詠んだ。

廿七日、風吹き波荒ければ、船いださす。此れ彼れ畏く歎く、男達の詩に、日を望めば都遠しなどいふなる言のさまを聞き、ある女のよめる歌。

日をだにも天雲近く見るものを

(句解) 畏く歎く、きのふは道觸の神の恵によりて、天氣であつたが、けふは、このやうな天氣であるものだから、恐しき思をして、神様のた怒りにでも觸つたのではないか、唯事ではあるまいなど、空恐しう思はれて、皆歎き悲しむ。○日を望めば都遠し、晋書帝記といふ書に、目を擧ぐれば、則ち日を見れども、長安を見ず、といふ文句がある。○言のさま、日を望めば道遠し、といふ文句の心の有様。○或女、これも貫之の歌であるのに、わざと女が詠んだと言つたのである。○天雲、唯そらといふと同じこと。

(通解) 風が吹いて、波が荒いから、船を出さない。きのふまでは、好い天氣であつたのに、けふはこんなことである、神の罰ではあるまいかと、空恐しい思をして、尋な悲み嘆く。男の方が吟する詩に、日は反つて近いやうに見ゆるが、都は見わなから遠いやうに思はれる、といふやうな歌の様子を聞いて、或女が詠んだ歌に、

あの空にある太陽でさへ空近く見ゆるのに、都へ行かうとすれば、なかく

遠くて容易なことではない。
又ある人のよめる。

吹く風の絶えぬ限し立ちくれば

波路はいといはるけかりけり。

日ひと日風やまずつまはじきをして寝ぬ。

(句解) 限りしじは唯意味もあい字である。○いといといといといふことを約めたる語一層一倍といふ意と同じ。○つまはじきをして寝ぬ、爪を弾くのである。思々しく思ふ様にすること思々しく思ひながら寝る。

廿八日、よもすがら雨やまず今朝も、

廿九日、船出して行く。うらくと照りて漕ぎゆく爪のいと長くなりたるを見て日を數ふれば、今日は子の日になりければ切らず。

(句解) よもすがら、夜一夜、夜通し。○子の日なれば切らず、子の日には、手の指の爪を切らぬものと、むかしは言つたのである。世の中に思ひしとの叶はぬは、卯亥巳未に爪を切る故といふ俗には歌もあるほどである。

(通解) 廿八日、夜通し、雨が降り止まない。また今朝も降って居る。

廿九日は船を出すことが出来て、まことに好い天氣で、麗々と晴れくして居るところを漕いで行く。今日までは船の中で、毎日々々の心勞が甚しかつたために指の爪が延びて居たのも、氣が附かなかつたが、日を數へて見れば、もはや今日は子の日であつたから、縁喜で切らない。

陸月なれば、京の子の日のこと言ひ出で、小松もがなといへど、海中なれば難しかし。或女の書きて出せる歌。

おぼつかな今日は子の日か海士ならば

海松をだに引かましものを。

とぞいへる。

(句解) むつき正月の京の子の事、京にては子の日のお祝が面白いだらうと、色々なことを想像したのである。○小松もがな、子の日には小松を山からこぎて来て福壽を祈るものであるから、丁度子の日に、小松でも欲しいと願つて居る意難しかし。かしは言語の終につけて、その意を強むるものであるから、詞で言へば、唯困難

であるといふまで。○おほつかな心の濟まないやうな何か物足らない心もどない心。○海松みるといふ海藻で形は松のやうに黒くて葉がないもの。○引かましは未来のことを想像する時に用ゐむといふのと同じやうなもの。

〔通解〕正月であるから都の子の日の賑しさも思ひ出されて、いろ／＼と噂が出るものであるから、どうかして小松を曳くことは出来まいかと思ふけれども海の中であるから、どうすることも出来ないところが、或女が歌を詠んだと言つて出した歌は、

ほんとにけふは子の日であつて、小松も曳くことも出来なくて、儀式を除くやうで、心に濟まない海士であつたなら、せめて松といふ名が付いて居るか、海松でも引かうと思ふものに、海士でもないから、仕方がない。といふ歌である。

海にて子の日の歌にては如何あらむ、或人の咏める歌、

けふなれど若菜もつまず春日野の

わが漕ぎわたる浦に無ければ。

かくいひつゝ漕ぎ行く。

〔句解〕けふなれど、けふは子の日なれど。○春日野京都の春日野といふところは

むかしより若菜の名所。

〔通解〕海の中で子の日といふ歌の題は、頗る六ヶしい題であるのに、此歌はマア一寸出来たやうだが、他の人はどう見るであらうか。しかるに或また別の人が咏んだ歌は、

けふは子の日であるけれど、いつもの儀式に供ゆる若菜をつむことも出来な
いいつも摘む春日野が此あたり漕いで行く近邊の浦に無いから、京に居たな
ら必ず今日は、春日野に出て若菜摘をするのに、こんな海上であるから、子の日
でありながら、何とも仕方がない。あゝ都が戀しいことである。
かういひつゝ漕いで行く。

おもしろき所に船を寄せて、こゝや何處と問ひければ、土佐のとまりとぞいひける
昔土佐といひける所に住みける女、この船にまじりけり、それが言ひけらく、昔暫し
在りし所の名類にぞあなる。あはれといひて咏める歌。

年ごろを住みし所の名にしたへば

きよる波をもあはれとを見る

(句解) ねもしろき所風景のおもしろいところ。○此處やいづこ、こゝはごこと、餘り風景の好い所であるから、尋ねたのである。○土佐泊、阿波國撫養港の奥にある。○昔土佐といひける所に住みける女、嘗て土佐とか言つた所に住んで居た女といふことであるが、實は女でなくて貫之自身の事を、洒落れてわざと書いたので、この船に交れり、と書いてあるのも、此船の中に、かやうな人が乗合つて居るとわざと洒落れたそれと同じ筆法なのである。○言ひけらく、言ひけるのるを延ばしてらくと言つたので、意味は少しも違はない。○昔暫し在りし所の名類、むかし暫し居た土佐といふ國と同じ似寄の名である、何んだかなつかしいと言つて歌を詠んだ。○年ごろ年頃年來、○きよる波、毎日打ち寄せて来る波でもなつかしい(通解) 風景のよい所に船を寄せて、こゝは何處だらう、と問うたれば、土佐の泊といふところであると言つた、先頃土佐といふ國に居た女が、此船に乗り合つて居たが、其女がいふには「むかし暫し居たところの似寄の名である、ほんとなつつか

しいと言つて、詠んだ歌は、

幾年か久しい年頃住んで居たところの名を負んで居る泊の名あるからゆたくと寄せ来る波も、何んだかなつかしいやうに見える。

三十日雨風吹かず海賊は夜歩きせざるなりと聞きて、夜半ばかりに船を出して阿波の水門を渡る夜永なれば西東も見えず、男女辛く神佛を祈りて、この水門を渡りぬ。寅卯の時はかりに奴島といふ所を過ぎて、田無川といふところを渡る。からく急ぎて、和泉の灘といふ所に致りぬ。

(通解) 三十日雨風も吹かない。海賊は夜は来ないと聞ひたから、夜半頃に船を出して、阿波の瀬戸を渡る夜永であれば、夜もなか／＼明ず、西も東も眞闇で分らなくて、心細いから、男も女も命辛々神佛を祈つて、此瀬戸を渡つた。午前五時頃、奴島といふ所を過ぎて、田無川といふところを経、一生懸命に急いで、和泉の海に入つた。奴島は淡路國にある島にて、土佐の泊から来ると、丁度所謂阿波の鳴戸を過ぎて、から着くところである。それから行けば、紀淡海峡を経て、和泉と紀伊との國境にある田無川に着くのである。こゝに来ると、もはや内海であるから、海賊の恐れも

なく安心のことである。けれども同じ和泉の小津の港までは寄港するところもなく、皆海上であるから、尙多少心細いところがある（いふこともあるまい）。今日海に、波に似たるものなし、神佛のめぐみ、あはれぶに似たりけふ、船に乗りし日より数ふれば、三十日あまり九日になりけり。今は和泉の國に來ぬれば、海賊物ならず。

（句解）あはれぶ、憐むといふにおなじ。○物ならず、物とも思はぬ、なんとも思はぬといふこと。

（通解）今日は、お天氣海の上が靜で、波らしいものもあゝ。船に乗つてから數へて見れば、三十日を餘つて九日になつて居るが、今は、はや、和泉の國になつたから必強くなつて、海賊も、恐ろしくも何うもなくなつた。

二月朔日朝の間雨降り、午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出で、漕ぎ行く海のうち、昨日の如くに、風浪見えず。

（句解）朝の間、あさの間。○午の時ばかり、正午の時。

（通解）二月一日、朝間雨が降つたけれど、正午頃に止んだから、和泉の灘といふと

ころから出帆して、漕ぎ出した海上は、きのふのやうに、風浪も立たずに穩かである。

黒崎の松原を経て行く所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに白く、鳥のいろは蘇枋にて、五色に今ひといろぞ足らぬ。

（句解）蘇枋染料で、色は、紅染に似て、少しく暗いものである。○五色に今一色ぞ足らぬ。五色は青黄赤白黒であるが此處は、黒崎の黒、松の青、浪の白、貝の赤であつて今一つの黄が足らぬといふ意味である。

（通解）黒崎の松原あたりを見て、舟は行くのであるが、黒崎といへば、黒い崎である、さうして、そこに生えて居る松の色は、眞青、磯打つ浪は、雪のやうに白く、濱邊にある貝の色は、蘇枋のやうで赤い。だから五色に今一色が足らぬのである。

此の間に、今日は箱の浦といふ所より、綱手をひきて行く。かく行くあいたに、或人の咏める歌

玉くしげ箱のうらなみ立たぬ日は

海をかゝみとたれか見ざらむ

(句解) 綱手舟を引きて行くところの綱曳舟の曳綱である。○玉くしげ箱といふ詞の枕詞である。玉といふは賞めたる詞、くしげといふは櫛箱であるから、結構な櫛箱といふ意である。

(通解) かういふうちに、今日は、箱の浦といふ所から、綱手をつけて曳船をして行つた、かうやつて行くあひだに、或る人が詠んだ歌。

箱の浦の浦波が少しも立たず、平穩な日は、海をば鏡と見、あゝ人が誰があらうか、ありばせぬ。箱の浦の枕詞の玉くしげ、即ち結構な櫛かんざしといふ詞を、初に置きて、同じお假粧道具の鏡といふ詞を後に置いたところは、一寸面白い積りなのである。

又船君のいはく、この月までありぬることゝて、歎きて苦しきに堪へずして、人もいふことゝて、心やりにいへる歌。

ひく船の綱手のながき春の日を

四十日五十日まで我は經にけり。

(句解) この月までなりぬる事とて、十二月二十一日に出てから、この二月までも

かゝつたと言つて○人もいふことゝて、他の人も詠むことだからと云つて。

(通解) また船のあるじがいふには、この二月まで、どうどうなつたと嘆いて退屈に堪へられなくて、人も詠むことだから、私も詠まうと云つて、氣慰みに一首詠んだ。

ひき船の綱手のやうな、長い／＼春の日を、四十日も、五十日も、船の上で私は暮らして來た。

聞く人の思へるやうな、なぞたいごととなるを、ひそかにいふべし。船君の辛くひねりいだして、よしと思へることを、えしもしひねとて、さゝめきてやみぬ。俄に風浪高ければ、止まりぬ。

(句解) なぞたいごとなる、何うしてこのやうに平凡であるか。○辛くひねりいだして、エーヤットやう／＼の事で考へ出して。○えしもしひね、ほしものしものは唯語勢を強むる詞、えはごうもとかえうとかいふ意で、さうして誣ひて悪口を云はれやうかど譯するがよからう。○さゝめきてやみぬ、さゝめき合つて船君の歌の評は止めた。

(通解) この歌を聞いた人達の心持ちでは、何うしてこのやうな平凡な面白くない事を歌つたのだらうかと、ひそかに言うであらうが、船君は、辛苦して漸くのことに、考へ出して、自身では、善ひ歌と思つて居るのであるのを、せうしても、つまらないものだと、言ひ立てることは出来ないので、唯内所でさゝやきあつたばかりで止めた。とかくいふうちに、俄に浪が荒立つて来たから、碇をおろした。

二日、雨風やまず。日ひと日夜もすから、神佛をいのる。
三日、海の上、昨日のやうなれば、舟出さず、風の吹くことやまねば、岸の波立ちかへるこれにつけてよめる歌。

緒をよりてかひなきものは落ちつもる

涙の玉子ぬかぬなりけり

かくてけふも暮れぬ。

(句解) 岸の波たちかへる。岸邊に、沖から打ちよする荒波が、寄せてはかへし、寄せてはかへし、その波の寄せかへるのを見て、飯をといふ詞を羨ましく思つたのである。○緒をよりて、思ふに、此折船中で、舳屈まぎれに、紙か、絹片か、で、緒繩を繕つて

居つたのであらう。

(通解) 二日、雨風が止まない。日ンが一日、夜ンが夜通し、海上安全を神ほとけに祈つた。

三日海上が、まだ、昨日のやうであるから、船を出さない。風が始終吹くものだから、ザブン／＼と海岸へ、波が打ちよする。打ちよする波は、まだじう／＼と引きかへす。これについて詠んだ歌は、

このやうに、いくら緒をよつても、よしがひのないことには、通常の玉ならともかく、船中の苦しさに、注いでほと／＼と落ちる涙の玉だから、貫かうとしても仕方があらず。

かうして、けふも暮れた。

四日、かちどり、今日風雲のけしき甚悪しといひて、船いださすなりぬしかれども、ひねもすに、浪風たゝす。この楫取は、日もえはからぬかたなりけり。

(句解) ひねもす、終日といふこと。○日もえはからぬかたなり、日和も、よう見定めることが出来ない。乞兒の馬鹿野郎かたゐるは、實は不具なものをいふのである。けれ

また乞兒びじやをいふ。空模様も見あやまつたから、立腹して罵ののしつたのである。

(通解) 四日、楫取は、けふは、空あひが、甚だ悪い、といつて、船を出さなくなつたけれど、一日中少しも浪風は立たない、實にこの楫取は、空模様も、日和ひよりも見ることが知らぬ馬鹿野郎であつた。

此泊とまりの濱には、くさくさのうるはしき貝、石など多かり、かゝれば、たゞ昔の人をのみ戀ひつゝ、船なる人の詠める。

よする波うちもよせなむわが戀ふる

人わすれ貝おりてひろはむ

といひつれば、ある人の堪へずして、船の心やりによめる。

わすれ貝ひろひしもせじ白玉を

戀ふるをだにもかたみと思はむ。

となんいへる。女兒のためには、親おや幼わかくなりぬべし。

(句解) くさくさ、種々しづか澤山さわ。○かゝれば、かくあれば、といふことにて、このやうに貝や石などが澤山多くあるから、○昔の人、死にて此世に居ない、即ち土佐で死んだ

女の兒のこと、此兒が居たなら、此港の貝や石を拾つて嬉しがることであらうと思ひ出したのである。○うちもよせなむ、なんは願ひ望む意味の助動詞で、ごうか打ち寄せて下さい。○忘れがひ、貝の名、忘れといふ名の貝だから、それにかこつけて、我戀の人を忘れたいと言つたのである。○堪へずして、悲しみに堪へずして、堪へきらずに、○白玉、玉や貝などは、同じく人の珍重するものだから、これを人の子に譬へたのである。兒を玉にたとへたことは、昔からあることで、かの萬葉集といふ本にも、山上憶良やまのうえといふ人の歌に、我中なかつの生れ出でたる白玉の吾子わがこ古日ふるひと言つて居る。○女子のためには、唯子の爲ためというて、よいところであるが、こゝは女子であつたから、さう言つたのである。

(通解) この泊りの濱には、うるはしい貝や石などが、澤山にある。澤山あるにつけて、只管ただ亡なくなつた女兒を思ひて、船に残つて居た人が詠んだ。

このやうに貝石などを、打ち寄するならば、ごうか浪よ、忘貝をも打ちよせて下さい、さうすれば、わたしが戀ひ慕たつて居る、亡兒を忘れうとして、其忘貝を拾ひませうものに

と言つたれば、また或人は堪へられなくなつて、氣慰みに詠んだ歌は、

たとひ波が寄せても、わたしは、うの忘貝を拾うて、忘れやうとは、しますまい、むしろ、あの玉のやうであつた亡兒を戀ひ慕ふ情をでも、慰めて後の形身と思つて残して置ませう

というた、燒野の雉子、夜の鶴で、亡兒のためには、親の心は、慰にかへるものである、玉ならずもありけむと、人いばむや、されども、死にし子、顔よかりしといふやうもあり、

(句解) 玉ならずもありけむと、此歌で白玉といつたけれど、まさか、玉のやうにもなかつたと、皆笑うまいか、大かた笑ふであらう。

(通解) まさか玉ほど善くもなかつたであらう、と言う人もありませう。しかし、昔から死ぬる兒は、みめよしと、諺にもいふやうである。

猶おなじところに日を経ることを歎きて、ある女のよめるうた。

手をひで、さむさも知らぬ泉にぞ

汲むとはなしに日ごろ経にける。

(句解) ひで、手を水に入れる、つける。○塞さ、冷やかさ。○泉、地より湧き出づる水であるが、こゝでは、今泊つて居るところが、和泉の國であるから、即その國の名にかけたのである。○汲む、手ですくふこと。

(通解) やッぱり同じ所に、日をいつまでも費して居ることを、嘆いて、詠んだは、ほんとの泉であれば、手をつくれれば、すぐ冷かさを感ずるものであるのに、手をつけても冷かさを感ぜぬ、名ばかりの和泉といふ國に、その泉を汲むことも出ず、後に日を費した。

五日、けふ辛くして、和泉の灘より、小津のとまりを追ふ。松原めもはるく、なり。かれこれくるしければ、詠めるうた、

ゆげごなほ行きやられぬはいもがうむ

をづの浦をるきしの松原。

(句解) 小津、和泉國和泉郡の今の天津である。○めもはるはる、見る目も遙々といふ意で、見渡される限り遙々松原が遠くつゞけるのである。○いもがうむをづのをといふ詞の枕詞、即ち妹が續む草といふ意、女が續む草の小津といつたのであ

る。

〔通解〕 待ちに待つたが、けふ、ヤットのことで、和泉の灘から、小津の泊を指して、漕ぎ出した。小津の泊は、見渡す限りズート松原ばかりである。いろくど、苦しいことがあつたから、詠んだ歌。

行げどく、なほ行末はるかで、行き過ぎられぬのは、女が續む苧の、小津の浦の浦ついきまであるところの長い松原である。

かくいひつゝくるほごに、船どく漕げ、日のよきにと催せば、楫取船子どもはいはく御船より仰せたぶなりあさきたの

出でこぬさきに綱手はやひけ。

といふ。

〔句解〕 催[○]す[○]せ[○]きた[○]てる。○仰[○]せ[○]た[○]ぶ[○]なる。た[○]ぶ[○]は[○]た[○]ま[○]ふ[○]といふに同じ。○朝[○]きた[○]朝に北の方より吹いてくる風。

〔通解〕 かやうにいひながら、漕いでくるうちに、オイ、船を早く漕げ、この好い天氣のうちには、催促したれば、楫取、船子共がいふには、

御船から急いで漕げと仰せらるゝから、みなの衆、朝北の、吹いて、來ないうちにその綱手の繩を早く曳け、
というた。

この詞の歌のやうなるは、楫取のおのづからの詞なり。楫取は、うつたへに、われ歌のやうなること、いふにもあらず。聞く人の、あやしく歌めきてもいひつるかなとて、書き出だせれば、げに三十文字あまりなりけり。

〔句解〕 この詞、楫共のいつた詞。○う[○]つ[○]た[○]へ[○]、ひ[○]と[○]へ[○]に、一向にと同じき副詞、こゝは唯只管の意として解してよし。

〔通解〕 この詞の歌のやうであるのは、楫取が自然に言ひ出したのであつて、何も楫取は心あつて折角、歌を詠まうと思つてのことでもない。唯これを聞いた人がマア、奇妙に歌らしくいうたものである、と云つて、試に文字に書き出して見れば、ほんとに三十一文字になつた。

今日、浪な立ちそと、人々ひねもすに祈るしるしありて、風浪立たす。今し、かもめ群れ居てあそぶところあり。京の近づくよろこびのあまりに、ある童のよめる歌。

いのりくる風間と思ふをあやなくも

かもめさへたに浪と見ゆらむ

といひて行く間に、石津といふところの松原、おもしろくて、濱邊とほし。

(句解) 浪な立ち、浪立つな、立つてくれるな。○今ししは唯語勢を強むるだけのもの意味は、今といふと違ひない。○かざま風の絶え間。○あやなくも、これは、わけもわからず、理も立たず、わからなくとも、いふやうな意、わけもなく、やくだいにもと言つたら一番よからう。○石津、和泉國大鳥郡にある。

(通解) 今日、浪が立たないやうにと、一日中、神佛に祈つた甲斐があつて、浪が立たなかつた。折しも、今、鷗が群れ集つて遊んで居る、おひく内海に入つて来た。と見えて、淺瀬に鷗どもが遊んで居るのを見ても、みな京が近くなつて来た。童までも、歌ふ心になつて来て、詠んだ。

けふは浪が立つてくれなど、終日祈つたしるしに、今日はめづらしくも、風が絶間になつたと思つて喜んで居るのに、あいにく、をりもをりこて、やくたいな鷗でさへも、白いから、浪が立つて居るのではないかと見わて、肝が冷える。

といつて行くあひだに、石津といふ所の松原が来た。

はるくくと打ちひらけく面白く濱邊も遙に

實に面白いところで、濱邊はるくと打ちひらけて、見わたされるところである。といひてゆく間に、石津といふ所の松原おもしろくて、はまべとほし、またすみよしのわたりをすぎゆく或人のよめる。

いま見てぞ身をばしりぬる住の江のまつよりさきにわれはへにける

(摘解) ○おもしろくて、景色の奇麗あること。○わたりは遠なり

(通解) と歌讀みながら行く間に、和泉國石津といふ所の松原の影色が奇麗にして、濱邊も廣ろく遠おい、そしてまた住吉の渡りを漕ぎつゝ、行く中に或る人が讀みた歌の大意は

住吉の松は年經ぬるものと皆人々が云ひつるけれども、今此處で見ると其の松の年の經たるよりはさきに我が年の方が老ひ舊りたわい、との意である。こゝにむかしつ人のほ、ひと日かたときもはすれねばよめる。すみのえに舟さしよせよわすれぐさしるしありやとつみてゆくべく

とあんなうつたへにわすれんとはあらでこひしきこゝろしばしやすめて、またもこふるちからにせんとなるべし

百二十八

〔摘解〕むかしつ人のほ、このむかしつのつの字は助辭にて單に昔しの人といふに同じ、即ち紀貫之の亡女の母と云ふ意にて即ち紀氏の夫人のこと〇うつたへには偏の字をあて俗に「ヒタスラ」又は「一向」などの意なり

〔通解〕此處にてさきになくなりた娘の母即ち紀貫之の主の夫人一日片時も其死したる女兒のことをわすれられぬから讀みた歌の大意は

其亡母の事を打忘れたために、わすれ草を摘みて行くからして、住の江に船を漕ぎ寄せてくれよ、もしやこのせつなきこゝろを忘すれることができるか、できぬかしらぬが兎に角この愛をほらしたいから

和名抄に、萱草を和須禮久佐とあり毛詩に、焉得諛草、言樹之背、其詩釋に萱草念人忘、憂とあり諛草とは即ち萱草のことにて即ちこゝろに云ふ忘れ草のことである「となん」は推定の辭にてさだかならねども儘かに此の様な歌讀みたがこれは、一向に其亡女のことを忘れようと言ふことではない其亡女を戀ひ慕ふせつなき

心をしばしの間やすめてまた慕ふことのちからづけにしようとの思ひでありたであらう

かくいひてながめつゝくるあひだに、ゆくりなく風ふきてこげどもくしりへしぞきにしぞきて、ほどくしくうちはめつべし、かちどりのいはく、このすみよしの明神は、れいの神ぞかし、ほしきものぞおはすらん、とはいまめくものか、さてぬさをたて、まつりたまへといふ、いふにしたがひてぬさたてまつる

〔摘解〕ゆくりなくは「ふ」と思ひかけなくの意〇しりへしぞきは、後ろへ益々退り行くこと〇ほどくしくは「ヨツポト」即ち殆んどの意〇うちはめつべしは打ち陥るらるゝようでありた〇れいの神をかしは荒神のこと〇いまめくものか、いまめくは當世の愆ふかき人情めくものとの意〇れいのは靈顯あるとの意〇ぬさは幣のこと

〔通解〕斯くの如くに言ひてながめながら涙り來る間に不意に風が吹き出して浪が荒れ立ち舟を如何程こぎても漕げばこぐほど後ろへ益々退りぞきて殆んど海の中におちいるようでありた、船子共の言ふには、此處の住吉の明神は荒神

百二十九

にて何時でもほしきものおはすときは風を起し浪を立て給ふと云ふ様に靈顯ある神であるから今は何か欲しきものがおはすであろうと言ふたが、なるほど住吉明神も當世の慾ふかき人情めかれるのであろうか而して早く幣をたてまつれど、船子が言ふから、言ふに従ひて幣を奉まつりた

かく奉れども、もはらかせやまで、いやふきに、いやたちに、かせなみのあやふければかちどりまたいはくぬさには、御心のゆかねば御船もゆかねなりなほうれしと思ひたまふべきもの、たてまつりたまへといふ

またいふにしたがひていかいばせんとて、まなこもこそふたつおれたゞひとつあるかゝみをたてまつるとて海にうちはめつればくちたし、さればうちつけに、海はかゝみのごとなりぬれば、ある人のよめる歌

〔摘解〕 もはら専の字をあつ俗に「トント」と云ふに當る。○いやふきには、いやは彌々の意なり、ふきては風吹きてなり。○御心のゆかねば神の御心また満足し給はねばあり。○まなこもこそ二つ、これ云々は人身中最も貴しとする眼にても二つこそあれ其かけがへもなき鏡を手向奉るとなり。此は例の諧詞である。○うちつ

けは卒爾なり俗に「スグ」に云ふに當る

〔通解〕 かようにして幣を奉りたけれどもとんと風がやまないで風いよゝ吹き波がいよゝたちさはぎて風波が非常に船が沈むほど危険であるから船子共は又曰ふには今奉りたる幣にては明神様の御心が移つらぬから御船も進まぬのであろうからなほ神様の氣にむいたものを奉まつりなさいといふから其いふに従つて如何にしたらばよかろうかとて眼こそ二つある只一つはかにない大切の鏡を奉りたところが卒然風も浪もやみて海上は恰かも鏡の如く平穩になりたから此有様について或人の讀むた歌

「ちはやふる神のこゝろをある、海にかゝみをいれてかつみつるかな」

いたく住の江のわすれぐささしのひめ松なせいふ神にはあらずかし、目もうつらゝかゝみに神の心を、こそは見つれ、かちどりのことばは、神の御心なりけり

〔摘解〕 住の江のはすれ草さしのひめ松云々此はよく歌の引言にする詞であるが斯く輕々しく詠むやうなるやさしき神ではない真に神慮をそろしき神と云ふ意である。○楫師は船子のこと

〔通解〕 ちはやふる神の云々歌の大意は神の御心のある此海へ鏡を打入れて神慮満足し玉ふや否やと眺めて見たるなり。かつ見つるは鏡より出たる縁詞である箇様に非常に住の江の忘れ草、峯のひめ松など云ふやさしき神様ではない鬼に角に神慮は御満足せられたであらうかと眺めて神の御心を鏡にかけて見ましたが誠に楫取の言ふた辭は神の心と同一でありたわい

六日 みをつくしのもとよりいで、難波の津につきて河尻にいるみな人々女をさなきものひたひに手をあて、よろこぶことふたつなし、かの船るひのあはぢの島のおほい子みやちかくなりぬといふをよろこびて船ぞこよりかしらをもたげさせてかくすいへる

いつしかといふせかりつるなにはがた

あしこぎわけてみふねきにけり

いとおもひのほかなる人のいへれば、人々あやしがるこれが中にこゝちなやむ船君、いたくめで、ふなゑひしたまひしみかほには似ずもあるかなどいひける

〔摘解〕 みをつくしは浮標の文字と同じ船舶の通行に便りする目標杭を云ふ〇

江尻は淀河の流れ來りて海に注ぐ所なり。〇ひたひに手をあて、は額に手をあてとは畏れたる時を喜びの時にする表容である。〇あはぢの島のおほい子は此は前に淡路の島のたうめといひし人にて紀氏に仕へたる老女である。〇おもひのほかは案外のこと。〇いたくめで、は甚だ賞してなり

〔通解〕 六日の日に浮標のそばから船を出して攝津國西成郡の難波の津といふ所に船をつけて淀河の川尻に入りた皆人々女子も老人も額に手をあて、喜こびうれしかること限りなし彼の船に酔ひて苦しみて居たる淡路の老女も京の都か近くなりたることを喜こびて船庭より頭をにゆうともちあげて斯様なことを言ふた

何時か難波の津に船が到着するか、と待遠にして居たるに今や御船を漕ぎ寄せて其處に着けたわい

最も案外なる人の言ひ出したる辭であるから人々不思議かりて居た其中に氣分悪るかりた紀實之自身もこの辭を非常に賞めこびてかねて船酔して難義せられた顔には似ないでよく言ふたな、と言はれた

七日 けふは江尻に船いりたちて漕ぎのぼる川の水引てなやみわづらふ船ののぼることいとかたし

百三十四

〔摘解〕 漕ぎのぼるは淀川を船にて漕ぎ上るなり○川の水ひてなやみわづらふは淀川の水枯れ乾て船の通行難澁するといふこと

〔通解〕 七日今日は河尻に船を入れて船を漕ぎのぼりた川の水が枯れて困難にて船ののぼること殆んど難澁でありた

かゝるあひだに船君の病者もどよりこち／＼しき人にてかうやうのことさらしらざりけりかゝれどもあはちのたうめの歌にめで、みやとほこりにをやあらんからくしてあやしき歌ひねりいだせりその歌

きときては川のほり江の水をあさみ

ふねもわが身もなづむけふかな

〔摘解〕 船君の病者は紀氏自身のことなり○こち／＼しきは無骨の意にて歌よむことの無器用なるを云ふかうようのことは此の如き事なり即ち淡路の島のおほい子の歌を指す○みやこほとりにやあらんは京都へ近づきたりしを喜び

誇る意のあやしき歌ひねりいだせりは奇怪なる宜くもない歌をウメキ田したといふ意○

〔通解〕 かようにしてあるあいだに病人ある紀貫之は元來無器用ある性質であるから到底淡路の老人のように歌などを讀むことは更らに知らない去れ共此人の歌ひし歌を喜び賞むるにあまり又自分にも都へ近くなりたことを喜び誇りておるのであるから、ようやくうめき出たした歌は

荒き浪路を経て漸やくにして此地にまで來たれりと思へば又た川の水が乾て舟の行き惱みはげしく加ふるに我身も病に罹りて苦痛するといふの意である

〔注意〕 きときてと重ねたるは意をおもくすることあり

これはやまひをすればよめるなるべしひとうたにことのかねは今ひとつ

とくと思ふ船なやますはわがために

水のこゝろのあさきなるべし

この歌はみやこのちかくなりぬるよろこびにたへすしていへるなるべしあはちのこの歌におとれり

百三十五

あたくいはざらましものを、ぐやしがるうちに、よるになりてねにけり

〔摘解〕 あはちのこの歌はあはちは淡路の島のおほい子のことなり○この歌と
は御歌といふこと○あたくいはざらましものをとは、あたくは妬む意なりあは
ちの歌におどりたる歌を詠みてねたましく残念なるを云ふ○いはざらましも
のをは歌を詠まずして居りなばよかりしなどの意

〔通解〕 是歌はちやうど其時に病氣をして、居りたから簡様な歌を詠みたのであ
る誰人も歌にはあきぬものであるから今も一つこのような歌をよみた
京都へ行かんと思ふ船をかように川の水が乾て船行が難澁するはつまり水の
心か深切心なく我等を思ひやりをせないからであるであらう

この歌は都の近くなりたことを喜びてたまらずして歌ひたのであらう此歌
は淡路の老人のよみた歌よりは劣りておる

あゝ残念だ讀まねはよかつたど、ぐやしく思ひて残念かりておる中に夜になり
たからいねた

八日 なほ川のほとりになづみて、鳥かひの御まきといふほとりにとゞまる、こよ

ひ船君、れいのやきひ、おこりて、いたくなやむある人あざらかあるものもてきたり
よねしてかへりごとす、おとこどもひそかにいふなり、いひほしてもつるとやかう
やうのこと、ところ／＼にあり、げふせちみすれはいをもちゐす

〔摘解〕 なづみては停滞してゐること○鳥かひの御まきとは攝津國鳥養牧とい
ふ所あり○れいのやまひは老衰したる人に、よくある持病のことをいふたので
ある○あらざかななるものは鮮魚を云ふ○よねしてかへりごとす、は米を返禮に
したりといふこと○いひほしてもつるとや、は飯粒にて鮮魚を釣るといふこと
即ち鮮魚の返禮に米を贈りたから例の諧言もて云はれたのである○せちみ、は
節忌なり○いをもちゐす、は魚を食せずとなり

〔通解〕 八日の日は猶川の水が少なきたためこの川の邊に停まりて攝津の鳥飼の
御牧といふ所の近傍に止まりて居たが一寸の此の夜船君なる紀貫之主は例の
持病が起りて、非常に難澁でありた其時或る近所の人が鮮魚を持ちて見舞ひて
くれたから船の中に何も返禮するものがないから米を返禮にやりた、そこで他
の人等は窃かに言ふたであらう、ちやうど飯粒で魚を釣るようだと然し此様な

ことは此度の歸り道では所ろくで度々ありた斯く鮮魚をもらひたけれど今日
日は生憎節忌日でありたから此魚は用ゐなかつた

九日きころもとあきにあけぬから舟をひきつゝのはれども川の水なければ、
ざりにのみぞぬざる、このあひたに、わたのとまりのあがれのところといふ所あり
よねいをなごこへばおくりつ、かくて舟をひきのぼるに、なぎさのゐんといふ所を
見つゝゆく、その院のむかしを思ひやりてみればたもしろかりける所なり

〔摘解〕 めざりにぬざる、はぬざりの行くやうに舟が進まぬこと。○わたのとまり
は攝津の國にあり○あかれのところは人々船より上りて四方へ散り行く今の
追分の如き所を云ふ

〔通解〕 九日早く京都へ歸りたいと待ちかね急そぐから夜明けの明ぬうちより舟を
出したから如何程船をこぎ上りても、川の中に水が少ないから、ちようど、いざり
の行くがようにぼつ／＼とのぼりた、うれこれする中攝津國西成郡和田の泊よ
り上陸地なる追分がありた、が人々米や魚などを欲しきものを贈り來たりた、か
ようにして船を洩きて上るあいだに、諸の院〔河内國交野郡にあり昔文徳天皇の

離宮である)と云ふ所を見つゝ上り行きた其渚院の昔しの歴史のゆわれを思ひ
て見ると、いと興味がありて面白き所である

惟喬親王の御どもに在原業平の中將の

〔世の中にたえて、さくらのさかざらば、春のこゝろはのどけからまし〕

といふ歌よめる所なりけり、いま興ある人、どころに似たる歌よめり

千世へたる松にはあれぞいにしへの

こえのさむさはかはらざりけり、

またある人のよめる

君こひて世をふるやごの梅の花

むかしの香にぞなほにはひける、

といひてぞみやこのちかづくをよろこひつゝのぼる

〔通解〕 惟喬親王の御供人なる在原業平の中將此世の中に絶へて少しも櫻の花
の咲かぬものでありたならば春にみな浮き立つ人の精心も閑靜なものであら
うと歌はれた所である

この歌の文句結びの(まし)と云ふ字は推定の輕ろき辭である
そこで今船中の興味を感ずる人(即ち紀氏自身を指す)この所に似より縁故ある
歌を讀みた

此歌の大意は

千世の久しきを經ぬる松でありても、やはり松風の寒きことは昔も今も變りは
せぬけれど渚の院は僅々たる年代の間に斯様に荒れ蕪れたりさても果なきこ
とであるわいとたり

又或人の讀みた歌の大意は(紀氏自身のこと)

惟喬親王の君を戀ひ慕ひて年を経たる渚の院の梅の花の香は、昔も今も變りて
居ぬに、何故に渚の院ばかりは此様に變りて荒れたのであろうよとのことであ
る

斯ように歌を讀みて、京都の近づくことを喜こびながら上りた、

かくのぼる人々のうちに、京より下りし時に、みな人、子どもなかりきいたりし國に
てぞ、子うめるものどもありあへるみな人、ふねの泊る所に子をいだきつゝあり

のぼりす、これを見てむかしの子のは、かなしきにたへずして、

なかりしもありつゝかへる人の子を

ありしもなくてくるぞかなしさ

といひてぞ、さきける、ちゝもこれをきいて、いかりあらんかうやうのこと、うたこの
むとであるにしもあらざるべし、もろこしもこゝも、思ふことたへぬとき、のわざと
か、こよひ、宇土野といふ所にどまら

摘解 いたれりし國は任所土佐國を云ふ○おりのぼりす、は船より下りて陸に
上るとなり、○むかしの子の母、亡き子の母にて紀氏の夫人あり。

通解 斯く上る人々の中に京都より土佐の國に下りた時は誰人も小兒は無か
りたのであるが任所なる土佐の國にて、小兒を生み育てた人も居りて其人をも
見受けたが皆其人等は船の泊る所にては子兒を抱きながら上陸したり船に下
り降り込みたりしておる此有様を見て昔し亡くなりた子の母即ち紀氏の夫人
は、かなしみにたへずして、此歌をよみた

大意

任所なる土佐國へ下る時には子のなかりし人にも、みな子供をまうけて歸京するに我は反つてありし子を亡ふて歸るか悲しきことなり
と言ひて泣きて居た、父親なる紀氏自身もこれを聞きて如何に感じたであらうか

凡て此様なことは、あながち歌を好むとて讀むものではない、唐土でも日本でも詩歌は物好みに作るのではない、心に思ふことありて自然に發し來るわざであるとか云ふか實にそのとうりである今夜は攝津國島上郡の鴉殿と云ふ所に泊りた

十日 さはるることありてのぼらす

(通解) 少し故障がありて舟をやらす京へ上らなかりた

十一日 雨いさゝかふりてやみぬ、かくてさしのぼるに東のかたに、山のよこをれるを見て、人にとへば、八幡の宮といふ、これをさきてよろこびて、人々をがみたまつる山崎の橋みゆ、うれしきこと、かざりなし、こゝに相應寺のほとりに、しばし舟をといめて、さかくさだむることあり、この寺のさしのはとりに、柳おほくあり、ある人

この柳のかげの川のそこにうつるを見て、よめる歌
さいれなみよするあやをば青柳の

かげのいととして、あるかとぞみる

(摘解) さしのぼるは船を棹さし上ること○よこをれるは山の重なりて横たはること○とかくさだむることは、とやかくと京に入らん用意仕度を決定して置くこと。

(通解) 十一日雨が少しばかり降りたが後にはやみたかようにして船に棹さしこき上ぼりて居たが東の方にあたりて山が重疊して横はりて居るのを見て、あれば何處かと問ひたら山城久世郡八幡の宮であると答へた、この答を聞きて喜びて船中の人は皆拜し奉りた、山崎の橋も見えて來たから喜しきと此上ない此處即ち山城乙訓郡山崎の橋の近傍相應寺此寺は貞觀年中權僧正壹演の開基した寺であるの側へ暫時の間船を止めて、何や角やと上陸の用意身仕度をしたが、扱この寺の岸の邊りに柳の木が澤山に生いて居たが或人この柳の枝の影が川の水底にうつれるを見てよみた歌の大意は小浪の此岸に寄する波紋を見れば

青柳の水に映ずる其影は、千筋の糸を以て織物を織るが如くに見ゆるとなり
十二日 やまざきにとまれり

十三日 なは山崎に

十四日 雨ふるけふ車京へとりやる

(通解) 十二日と十三日の兩日は山崎に泊まりた

十四日に立出するつもりでありたが雨がふりだしたから今日乗る車を京都へ
とりにやりた

十五日 けふ車ゐてきたれり舟のむづかしさに、ふねより人の家にうつる、この人
の家よろこべるやうにて、あるじしたり、このあるじのまたのあるじのよきをみる
に、うたておもはゆ、いろ／＼にかへりごとす家の人のいでいりにくげならず、おや
／＼かなり

(摘解) 車ゐてきたれり車を率ゐて來れることなり○舟のむづかしさには俗に
「ムサクルシサ」といふに同じ○うたておもはゆは饗應が甚だ手厚くして氣の毒
に思ゆるとなり○おや／＼かなりは禮義うや／＼しく正しさを云ふ

(通解) 今日車を率ゐて來た長らくのあいだ船中に居て、むさくるしかりたが今
日ようやく舟を放れて人家に入ることが出來た、その歸り來たりて人の家に入
ると何れも家人に喜こべる有様で種々と饗應してくれた此もてなしのよきこ
と又其饗應する主人饗應の手厚きを見るに付けて氣の毒に思ひた種々と返禮
もしたかとかくゆづらしかりて喜び迎ふる人々が出たり入りたりする有様
は決して見苦くはない、禮義極めてうや／＼しく正しきことでありた
十六日 けふのゆふつかた京へのぼるついでに見れば山崎のたなゝる、小櫃の繪
もまがりのほらのかたもかはらざりけり
うる人の心をせしらぬとぞいふなる、かくて京へゆくに鳥坂にて、人あるじしたり
かならずしもあるまじきわざなり、たちてゆきしときよりはかへる時ぞ人はとか
くありける、これにもそれにもかへりごとす

(摘解) 山崎のたなゝるは、山崎町の店といふこと○小櫃の繪小びつは小供の饗
弄にする器物なり其櫃に藤の花や梅の花などの繪あるを云ふ○まがりのほら
のかたもまがりは和名紗に環餅とあり、ほらのかたは法螺貝の形したるをさす

今の巻煎餅の如き菓子をいふ、

(通解) 今日夕方京都へ上る道の序で、くを見るに山崎町の店先きにならべてある小供の玩具器物なる繪や法螺貝の如き形ちしたる菓子などの形ちありさまも昔しよりも變りて居らぬされどこれを賣り居る商人等の精神は昔しと變りて居るかどうかはしらぬけれども定めて昔しの如き質朴なるものではあるまい京都へ上り行く道にて山城國乙訓郡石塔寺の南なる島坂と云ふ所に其所の或人等饗應をしてくれたこれは思ひがけぬことで必ず此様な饗應をしてもらうわけはない筈でありた凡て出立して行く時よりは歸へる時こそは人々誰でも兎や角と深切にしてくれるものである此人にも其人にも返禮をした

夜になしてみやこにはいらんと思へばいそぎしもせぬほどに月いでぬ桂川の月のあかきにぞわたる人々のいはくこの川あすか川にもあらねばふち瀬さらにかはらざりけりといひてある人のよめる歌
ひさかたの月におひたる桂川

そこなるかげもかはらざりけり

又或人のいへる

あま雲のはるかなりつる桂川

そでをひてもわたりぬるかな

またある人のよめる

かつら川わが心にかよはねど

おなじふかさになかるべらなり

京のうれしきあまりに歌もあまりぞおはかる夜ふけてくれば所々も見えず京に
いりたちてうれし

(摘解) 桂川山城國葛野郡にあり○月のあかきは月の明るきをいふ○あすか川は大和國にありこの川はいと淺き川にていさゝか雨降りても直ちに水出て淵瀬の變る川なり○久かたの月に生ひたるは桂川といふ句の枕辭である○京にいりたちてうれしは京に着きてあゝ嬉しく喜ばしきをいふ

(解通) 夜になりて都に入ろうと思ひて居れば左様急ぎも爲ない彼是する間に

月出でたり桂川を夜の月の明りて渡りた人々皆云ふに此桂川は飛鳥川のように淺さくないから昔も今も淵瀬の場所が更に變りて居ないと云ふて或人の讀める歌の大意は

久方の月の中に生いて居る桂川の空と月とにうつる影は昔とすこしも變らずに見ゆるが京の人の心は如何にぞや變りて居るであらうとの意

また或人の讀む歌の大意は

天雲の遙かなる如く土佐國より遠方に思ひし桂川も今は袖を浸すばかりに渡ることゝなりたわいと云ふ意

又或人の讀みた歌は

此桂川は我々の心が通じて居る次第でなければども此川の流れの深さが如く

我々が此川を戀ひ慕ふて居た心と同じように深く流れて居るわいとなり

兔に角京都へ歸り着きたることの嬉しく喜ばしきわまり此様に歌も澤山讀みたつ此のものは嘆息の意あり段々と夜深けて來たから所々方角も見へずなりて京に到着して嬉しかりた

家にいたりて門にいるに月あかければいとよくありさま見ゆきしよりもまさりていふかひなくぞこぼれやぶれたる家をあづけたりつる人の心もあれたるなりけりあかがきこそあれひとつ家のやうなればのぞみてあづかれるなりされはたよりことにものもたえず得させたりこよひかゝることゝこわたかにもものもいはせずいとつらく見ゆれど心ざしはせんとす

(摘解) いふかひなくぞ詞にいはれぬ程になり○こわたかにもものもいはせず、聲高かに物をも言はぬとなり○つらなくは無情または薄情の文字をあつめ不深切なることを云ふ○心ざしはせんとすは返禮はせんと欲すとなり

(通解) 自分の宅に至りて門に入りたるに月の光りか明かいから最も能く其模様有様が見へたがうはさを聞きて居たよりも勝さりて言ふに言はれぬ程打毀れ破れて居た家を預つけた人の精神も此有様と同様に薄情にも荒れたのであらう、中垣こそはあるけれど一家のような有様であるから隣りより時々のぞき見てくれると云ふてあづかりたのである、さような次第であるから土佐の國から都へ便のある度毎に何呉れとなく絶へず品物をやりて居たのである、然るに

今夜歸りて見れば意外に此有様である薄情なものであると聲高には物を言われぬけれど、いと無情にて不深切なることに見ゆるけれども返禮丈けはじようと思ふて居る

さて池のいで、くぼまりて、水づける所あり、ほどりに松もありき五とせ六とせのうち、千とせやすきにけん、かた枝はなくなりけり、いまおひたるぞまじれる、おはかたみなあれにたれば、あはれど人々いふ思ひいでぬことなく、思ひこひしきがうちに、この家にて生れしをむなごのもろともにかはらねば、いかゞはかなしき、みな人もみな子いたきてのゝしる、かゝるうちに、なほかゝるにへずして、ひそかにこゝろしれる人ど、いへりける歌

うまれしもかへらぬものをわがやせに

こまつのあるを見るぞかなしき

とそいへる、なほあかすやあらんまたかくなん

見し人をまつのちとせにみましかば

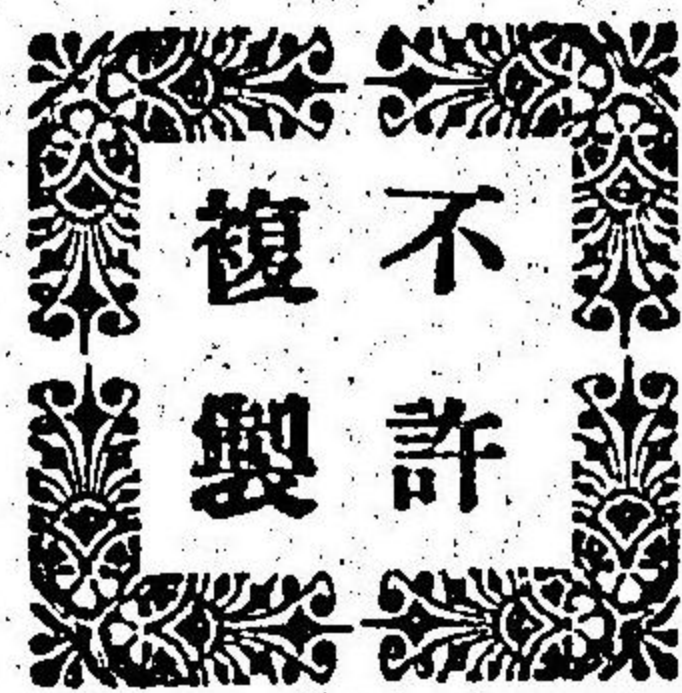
とほくかなしきわかれせましや

わすれがたく、くちをしきことおほかれど、えつくさすとまれかくとくやりてん

(摘解) 水づける所あり、は水のある所なりとなり○おほかたみなあれにたれば我屋敷中のもの大方荒れ廢れたればとなり○のゝしるは騒々敷言語すること○こゝろ知れる人は紀貫之氏の夫人をいふ○とくやりてんは此土佐日記は我が思ひ出たのまゝを記せし徒文にて他人に見せがたきこと多くあるから疾く之を破り棄てんとなり、やりは破りにててんは棄てんと云ふ意を含む詞なり(通解) 扱て池の如くに窪りて水の溜りてある所がある其邊りに松の樹もありたが何しろ五年か十年か経たる中に千歳も過ぎたものゝようは松の樹の片方の枝は切り降して無くなりて居る今頃生へたかと思はるゝものも交はりて居る大方屋敷の中は悉く荒れ切りて居るから私ばかりでなく他の人も皆を、あはれあさましき變化の有様であるものというた、何事何物を見るにつけても昔の事を思ひ出たして嘆きの種とならぬものはないが中にも此家の中にて昔し出立前に出産女の子を土佐の國に連れ行きたのであるが此度自分共の歸宅する

265

778



明治四十四年四月
十日印刷
明治四十四年四月
十日發行

著 者 明 治 中 學 會

東京市日本橋區龜島町一丁目卅九番地

發 行 者 田 崎 治 久

東京市日本橋區龜島町一丁目卅九番地

印 刷 者 笹 沼 仲 次 郎

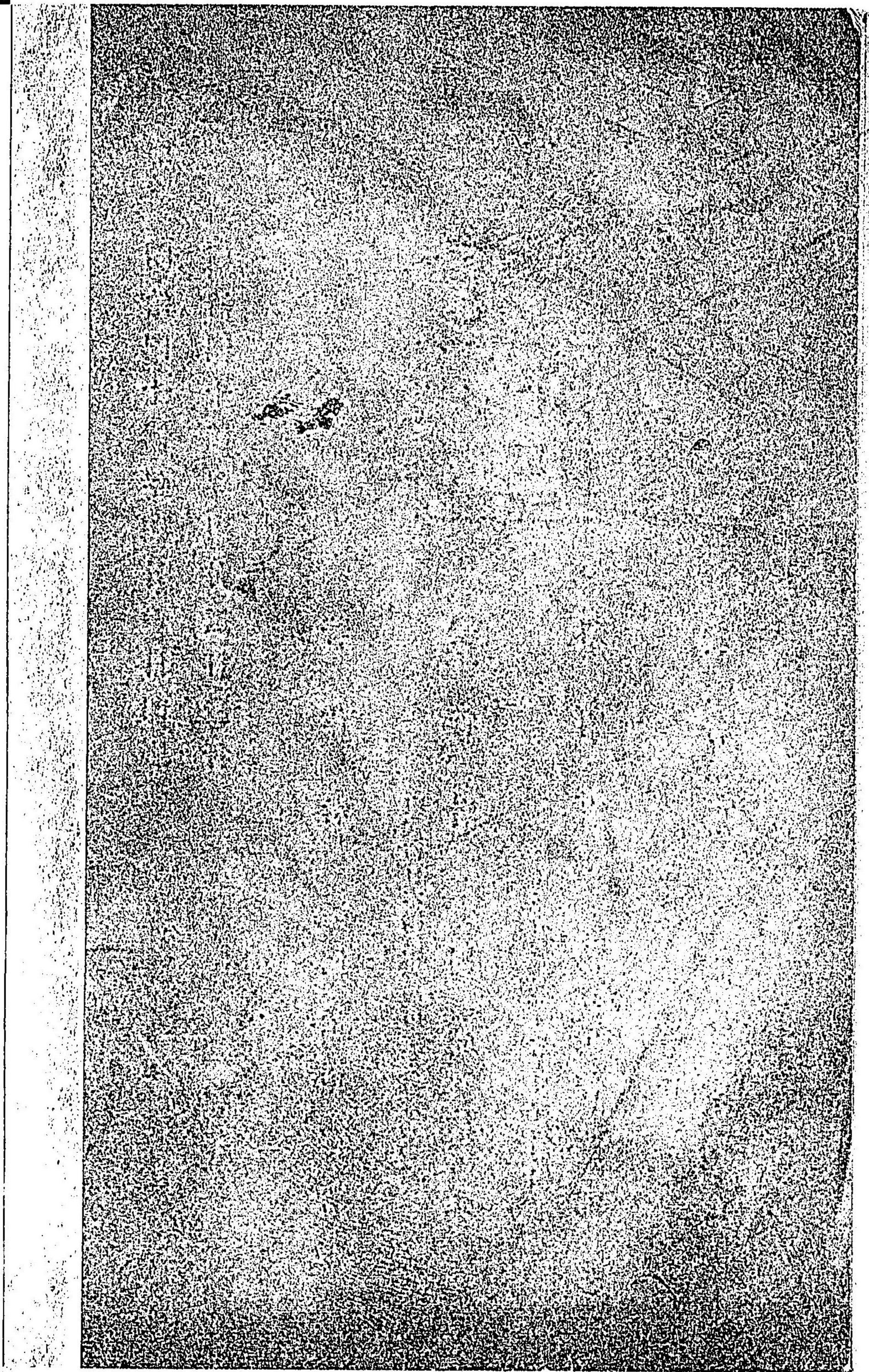
東京市日本橋區龜島町一丁目卅九番地

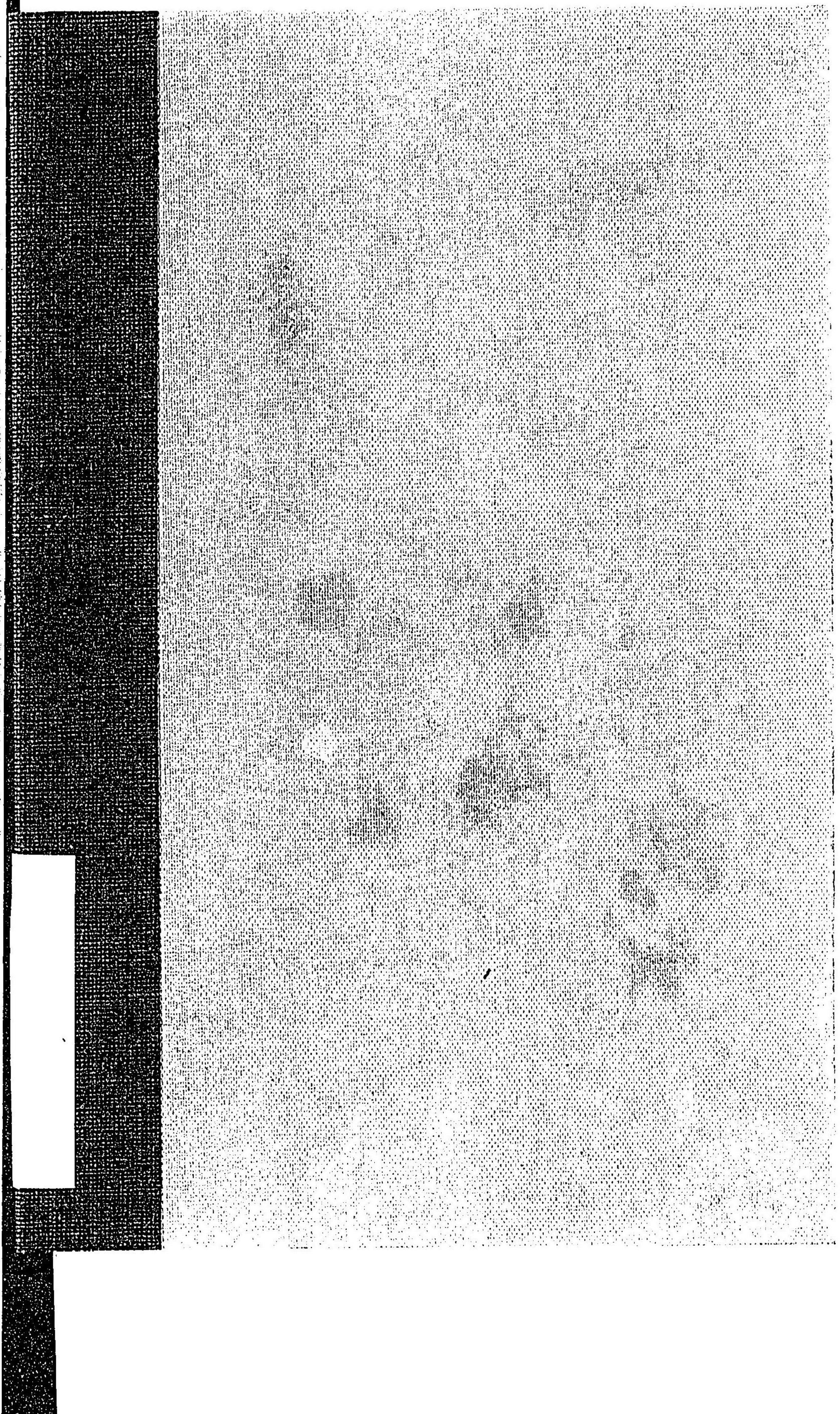
發 行 所 明 治 中 學 會

電話 湯花園 三八五七番
振替口座東京 四九八三番

國 文 講 義 終

時に共に連れ歸へることが出来なかつたから思ひ出すと如何の位い悲しきことであるか同行の船中の人々たちは皆子供を抱きてがやく騒々敷きはいで居たが、斯様な有様を見るか中にも猶悲しみに堪へないから、竊かに其自身の精神を知りて居る夫人と歌ふた歌の大意は
此家にて出生したる、女子の共に歸京せぬを、わが宿の庭に、昔しはなかりし小松の生ひたるを見るにつけ、いよゝ思ひ起して悲しいことである
と讀みた猶飽き足らず讀みた歌の大意は
亡女子を、此庭に生ひ出し松の千年の壽の如くに長からんことを見るならばかく二度と逢われぬ悲しき離別はあるまじきをとの意でありた
何分にも女の子のことが忘れがたく口惜しきこと多くありたけれど中々に言ひ盡すことが出来ぬもあれ角もあれ此日記は徒ら文であるから人に見られぬうちに疾く破り棄てよう
(完)





特22

734

第一教 国文講義

国立国会図書館

076915-000-4

特22-734

国文講義

明治中学会

M44.4

DAC-0078



